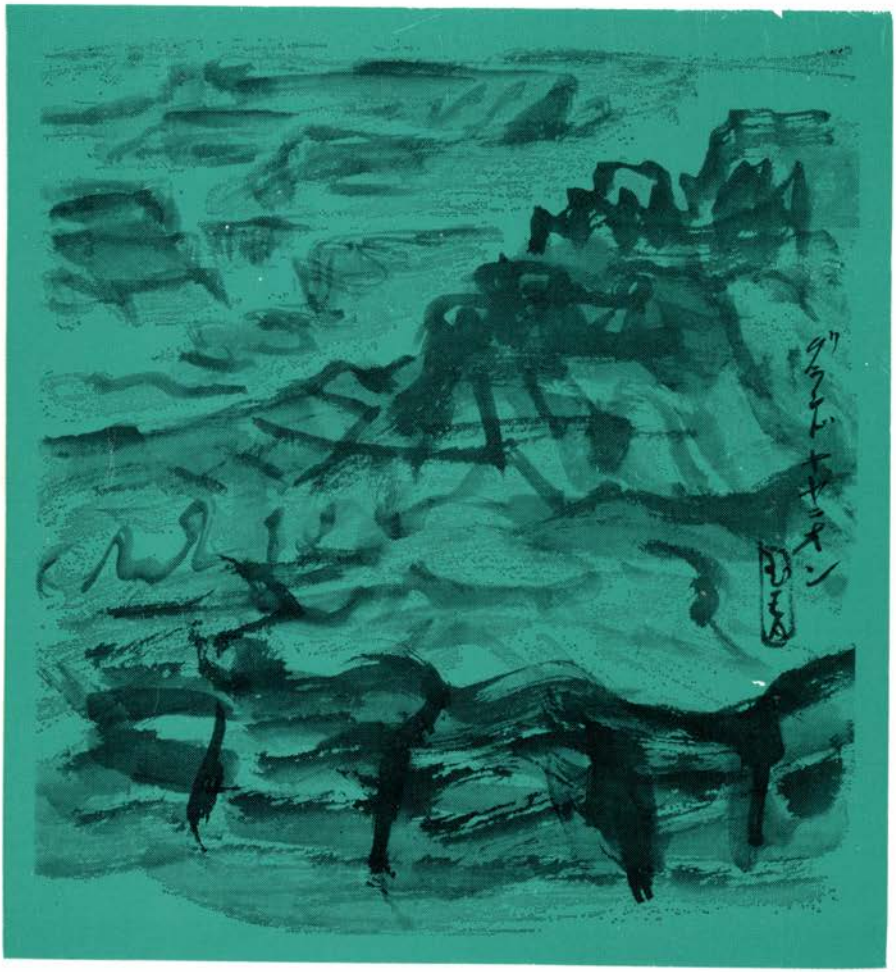
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年五月二十五日 印刷
昭和五十一年六月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五八九号



日川協加盟

No. 589

六 月 号

姉妹品大和錦印

九櫻

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

柔道衣
剣道具

早川繊維工業株式会社

大　阪　支　店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電　話（779）1690～2番

川柳塔社同人255名参加！

同人句集『川　柳　塔』

頒　価　1500円　送料 200円

尉と姥そらっとぼけた顔の皺

お節介を逃げてもゼニのない二人

貧乏神連れて律気な色男

散りともない散りともないと八重桜

あすへの命ととのえてから散るとする

中島生々庵

ご迷惑

只今2番ホームに14時37分発ひかり号が、8分遅れて到着致します。おいそぎのところを、列車遅延のため大変ご迷惑をおかけして居ります、とくりかえし、くりかえし恐縮した声で放送して居る。恐縮どころか、やれやれの胸なでおろしてる男が一人ここに居ることを、係りの駅員はご存じないのである。実は昨日市内の交通公社で家内が求めてくれた座席指定券があるので、悠々と紅茶でものんでからまだ20分間の余裕も考えながらホームに昇って行った。そこにこうしたアナウンスである。念のために座席番号を確めてみるとこれはなんと今まで57分発とばかり思って居たのが、今しきりに放送している37分発ではないか。あわてて今ホームに着いた列車に飛び乗った。5と3と活字が似てるとはいいながら列車が8分間遅れてくれたお蔭で、指定席もふいにならず。世の中の生活は面白いものと教えられ、同時に老醜をしみじみ味わったことである。

川柳塔六月号

座右の句

藤椅子に猿又の紐ゆるう居る　（栞）

私の句

ぬけぬけと我が青春に悔はなし　野村太茂津

川柳塔　六月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ご迷惑……中島生々庵…（1）
日記から……尼　緑之助…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十一）……（24）
清博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原　亮
鈴木黄・室山三柳・入江　勇・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…（4）
水　煙　抄……川村好郎選…（32）
麻生路郎物語……（18）……東野大八…（21）
秀句鑑賞……（同人吟）……橘高薫風…（30）
……（水煙抄）……工藤甲吉…（31）
近　作……諸家…（20）
百人一首と川柳…（24）……富士野鞍馬…（40）
愛染帖……正本水客選…（42）
女シリーズ……菊沢小松園…（45）
川柳研究家阿達義雄博士と私……石崎柳石…（26）

日記から

尼　緑之助

四月十一日、島根県ではやや奥地の木次町へ観桜句会に出席した。四十数名の集い。席題に「甘茶」が出た。私は五十数年前、少年の日、田舎のお寺で甘茶に出会った。灌仏会の行事だと知ったのは後のことである。以来甘茶に接することがなかった。

私の周辺に席を取っていた松江市の物識り氏数人、同じように頭をかしげた。「灌仏会の甘茶」のことであろうという一応の結論とはなったが。この土地では現今でも行事が生きているかも知れない。或いは何か日常飲用にでも使われているのではあるまいか？若い人には判っているのだろうか？甘茶を形容語で茶化すのも出て来そうだ？

披講の結果、灌仏会のそれであったことにホッとしたが、こんな時代ばなれのした題は適当か？否、地方事情に疎い私の方に問題があるのか？等、気がかりが尾を引いた。

灌仏会顔をしかめて飲む甘茶　緑之助

○

四月二十五日、大森風来子氏の句碑除幕と記念大会に岡山へ出かけた。

兼題「八重桜」桜には随分種類が多いとは

書評「生々楽天」……戸田古方…(28)
心にしみる人間寄席……東野大八…(44)
「川柳塔の歌」審査の経過発表……(46)
ふるさとの川柳ニュース……八木摩天郎…(29)
一分間の柳論……伊藤茶仏…(53)
枝豆の頃……吉田水車…(46)
堀内暁風氏逝く……米沢暁明…(47)
初歩教室……本田恵二朗…(50)
大萬川柳「ふんぎり」……川村好郎選…(52)
柳界展望……(54)
本社五月句会……(庸佑・整理)…(56)
各地柳壇(佳句地10選)……辻圭水選…(61)
「降参」……江城修史選…(48)
一路集「晴れ間」……西垣錦風選…(48)
「時間」……都倉求芽選…(49)
編集後記……(一三夫・葉子)…(65)

座右の句

灯台の夕陽　神話を抱きよせる　(緑之助)

私の句

天と地の恵み七十年呼吸　原独仙

聞いているが、四月上旬各地で花見として騒がれるのは一と重咲、そんな固定観念が私にはある。勿論八重桜も稀少ではないが、遅咲きと承知している。さて「八重桜」が題であれば、一と重咲きと区別して詠わねばなるまい。これは難かしい。

私の地方にも八重桜はあるが、前者に比べると数量は一割にも及ぶまい。私の庭隅にも一本あって今が盛りである。私の地方では季節はずれとも思われるので、いわゆる桜の観念から少し離れた存在感がある。前日岡山入りした私は、午後岡山周辺の観光をしたが、八重桜の多いのに驚いた。折から花盛りのせいもあろうか、岡山は八重桜オンリーではないか?のようにも思われた。句碑建立の吉備神社の境内にもずらりと並んでいた。

八重桜散らぬ男を迎えけり　風来子

除幕の碑に刻まれていた。碑の肩へ寄りかかるように一本の八重桜が花をつけていた。句意の真にふれ、岡山の八重桜を見せられた私の「桜」に対する観念にゆらぎが生じた。習慣にしても花にしても、所変れば何とやらこの四月には、これに似たおどろきに再三遭遇した。自己中心の独断に一種の恐怖と羞恥を感ぜざるを得なかった。

「八重桜」の披講で、私は無理に区別したことが徒労のようであった、可否は別としてともかく、迷いや詮索も勉強の一つではあろう。道はいよいよ広く、果てしない。

川柳塔

松原市　谷垣史好

リハーサルのつもりで遺書を書こうかな
ブランコは母のない子の子守唄
ほおずきを鳴らすと家が恋しなり
本棚に心貧しき書が並び
軽いめまいは美少女の片想い
小公園　乾いた土と老人と

鳥取県　林露杖

空蟬の墓標をしかと抱く構え
ソプラノもまじり迫暮の花宴
かい間見たミセスの情事語るまい
溶けそうな笑顔に妬心ひそませる
木石と見られ煩悩うろたえる
ワンクッション置いて忿怒の角を矯め

藤井寺市　西いわを

しがみつき岩に落付く苔の花
愛猫に甘えられてはこそばゆい
みそ汁に春を広げる蕗の薹

若本多久志選

朝の鐘耳そばだてている余韻
起きぬけに顔洗う水　心地よく

竹原市　山内静水

言論の自由毒消しいらんかね
あまりにも目の毒気の毒平和かな
手拍手で軍歌を歌う生き残り

宇治萬福寺参拝

唐風の障子クーニャン出て来そう
掌を合わす十八羅漢に身がすくむ

大阪市　本多柳志

冬の蠅お前も死期を逃したか
春の風裸婦も画布から出たかろう
大卒の大志を包む作業服
地球儀に平和の国の見当らず

祝生々庵先生金婚

拍手盛ん今日人生の三幕目

神戸市　小浜牧人

生々楽天　豊かな笑みの羅漢かな

春は花屋で幸福を売っている
二次会の酒から軽い罪を持つ
矢印に正直者が瞞される
鯉のぼりこの子を戦争へはやらぬ

島根県　堀江正朗

花咲いて隣りは軍歌うたう人
茶話に置いて帰った愚痴ひとつ
倖せにもう酔うている箸の先き
鼻歌の出る湯加減に湯負けする
顔見えぬ今もはたちの気で生きる

島根県　堀江芳子

桜競っても邪心など見せず
てのひらの固さは生きてきた安堵
土踏まずへ今日の疲れを撫でてやり
生きている感謝で朝が動きだす
逆らわず川は見つめていてくれる

兵庫県　遠山可住

正調の節にぴしやりと手が揃い
フルカウントの位置から栄転を送る
おや生きているやないかと水をやり
間引かれる菜っぱのように倒産し
春が来ても一円玉は拾われず

倉敷市　小幡里風

恋の文字砂を洗うて潮の満つ
雑草でよし可憐にもこぼれ咲き
たいやきのメロデー平和な花の下
花束が派手に届いた小さい義理
コンテナで嫁の荷届く三ＤＫ

倉敷市　藤井春日

スーツケース誰もが知らない旅に出る
態面が妻の勤めを許さない
生涯を積木遊びのように生き
一宿一飯恩義無き世のいとわしく
一隅に居て太陽をはばからず

青森市　工藤甲吉

千万無量三銭が五十円
きようもまた柩を背にして生きる
見馴れると愛嬌もある鬼の面
啓蟄の日をとしよりも背伸びする
正夢であっては困る夢に覚め

東大阪市　竹中肖二

贅肉を貯めて余生のふところ手
ちっぽけな自負が妥協をためらって
うぬぼれて自縛の縄を太く綯う
ふれあいを大切にして丸く生き
逆らえば水にも浮けぬものと知る

桜井市　岩本雀踊子

レール敷く妻の犬釘僕が打つ
何か云い忘れたような帰えり道
尖んがった神経にふれる音がある

叱らなくなった父をさびしがり
都会の水になじめぬ飢を抱く

新宮市　大矢十郎

スタンプが切手をそれて来た手紙
目撃者になれぬ私にひまがない
宝くじへ並ぶ汚職に遠い顔
ＪＩＳマーク付きと娘を喜ばれ
欲捨てた顔もやっぱり捨てていず

和歌山市　野村太茂津

鼓動まだ春風に乗る五体生き
長生きをし過ぎた気障な合言葉
性懲りもなく続けることのむずかしさ
一ト言は多過ぎはせぬ愛に触れ
木刀で岩を打つ日もある怒り

宝塚市　傍島静馬

一と区切りつけて深々すうタバコ
落魄の父はアルバム見たがらず
執拗に酢蛸にいどむ総入歯
春よそに夢二の少女憂い勝ち
花見団子たいやきくんに食われてる

岡山県　嘉数千代香

邪心断つことも覚えた花鋏
男ならと思う日もありおんな坂
今日がゆく失なうもののきびしさで
恍惚列車にわたしの指定席がある

夢はるか仰げば遠し雲の峰

大阪市　不二田一三夫

一ぴきぐらい蟻にもいよう怠けもの
雨の夜は無口な墓が喋べりだす
たばこ長々と灰になりペン快調
金銭に尾を振らぬのが手を焼かせ
家出した妻まで政治のせいにする

八尾市　高橋夕花

昼の月祈りの刻にまだ早し
カクテルに春の愁いを沈ませる
緋牡丹のかかる夜もあり過去の夢
歳月の節に絆をもつ夫婦
桜咲く去年は亡母と見たさくら

大阪市　河野君子

傾いた心に今年も花が咲く
春霞想いは届かないままに
逢いにゆく炎を濡らす春の雨
昂ぶりをさとす白髪の二三本
お茶の間に根を張り妻の灯を守る

倉敷市　小野克枝

直立の針を女の胸に持つ
責任を果す胃薬の人でいる
一徹を通す男により掛り
大吉を引いて淋しくなる女
薬にも毒にもなって友はよし

明日のことおもう人間葦になる
別々に生きるに絆に縛られる
耐えること知ってから女小石抱く
ひとの花朱く見える日の乱れ
針の上歩くこころで逢いに行く

八尾市　宮西弥生

テトラポッドと昔話のあたたかさ
わくわくと詩心ゆさぶるねこやなぎ
千本のさくらは千の意志をもつ
うぐいすの行方は聞かぬ花の宴
はくれんの極みましろき思慕の天

香川県　三井酔夢

勲章は妻が造ってくれるだろ
よろこびにつけ寂しさにつけ寿司を巻く
母さんの机にも来る新学期
笑うても笑う寂しさだってある
失敗をしなくなったら死ねるだろ

大阪市　小出智子

仕事ない日の春光がにくらしく
憤懣をふっと消してく春の風
雑草の中でタンポポ黄の主張
朧夜に浮き出した足まだ老いず
春の字を日記に一ぱい詰めておく

和歌山市　津田与史

舵のない枯葉　きままな型で舞い
夕茜今日の歩みを染めあげる
虚無感の続く日買った花といる
世の流れ渦の深さにうろたえる
野仏のふるえを見たり雪彼岸

島根県　錦織文子

足ることを知る駘蕩や春霞
花霞小さな母の手を繋ぐ
真白に名もなき花として生る
花芯から水をもとめる声がする
カトレアのような女で物足らず

倉敷市　能登原白水

はにかみのない娘を不肖児連れて来る
エゴの幕閉じて葬花の中に寝る
家計簿の妻の吐息は鞭である
賛成の手をあげ義理に負けている
家族から解放されて釣道具

倉敷市　稲田豊作

直球で勝負を賭けてきた若さ
雲一つ子供のころの夢ものせ
未練無く日記を焼いた日の決意
愛不在砂漠風紋変えてゆく
肩書が無いから肩が凝らず済み

竹原市　時広一路

母の涙は見えぬとこで落ち

西宮市　藤村〆女

尚耐えてゆけと仏間の父の眼が
孤に耐える或日の肌を撫でて見る
雨の夜の窓が心を狂わせる
握られた手に期待するさもしい血

三重県　川上大輪

山門を出て凡人に戻ってる
春闘のビラ職安で見る寒さ
反戦歌うたう女で子を産まず
ひとときをおんなに還る美容院

宇部市　平田実男

欠点を無くし人間味が薄れ
一皮をむけば与野党同じ顔
栄転のそれから胃薬飲み続け
パックする効果を女疑わず

倉敷市　田垣方大

春の芽に病後の尻をたたかれる
凡人の気楽さ花の下の酒
激流の過去あり深い淵の水
ふるさとの夢には草ぶき屋根の家

松江市　小林孤呂二

本当の恐さを多数決で知り
廻り椅子で考えているほめ言葉
春のどかならず予備校へ送り出す
飲むほどに視界は桜いま盛り

八尾市　高杉鬼遊

走資派の友一人と嚙み合わず
馴らされて高い煙草へ火をつける
小切手も週休二日土曜午後
定期券いつから笑わなくなった

竹原市　三宅不朽

春爛漫メルヘンが舞う鼓笛隊
声細き女が紫煙もてあそび
春愁のアベックばかりに会う夜かな
怒る時に怒り貧しさ口にせず

竹原市　小島蘭幸

ひしと抱くものあり幸福な女
ちっとも似てない自画像だから好き
黒いドレスが似合う女の無表情
旅人のうしろ姿となる夕陽

竹原市　森井菁居

ジレンマがとけるワインと思いたし
企みを捨て夜桜の美しい
旅情ふらりと立ち食いそばへ寄る
男ひとり動物園は味気なく

松江市　柳楽鶴丸

シクラメンに香りをつけた憎い人
パイプカットを愛と思うおろか者
魔女になりたいと妻の日記
生きているから空白のある日記

氷見市　関美子

闇裂いてトランペットは走るいなずま
公式のない人生にある答
手離しでぼろぼろ泣ける風車
趣味一つ母親以後への足がかり

大阪市　金井文秋

灯油を一かん買えば寒波去り
コツを聞くうちは本腰入れていず
時計進ませてその気になっている
運命の流れに女いかだ組む

大阪市　宮尾あいき

お年だっせと白髪がささやく
孫が来て淋しさだけを置いて去に
一人寝の枕を濡らす春の雨
芝生に寝てまだ炎え切れぬ落椿

大阪市　柳原静香

二人三脚夫婦で綴る愛の詩
春雨にベンチ孤独の翳り持つ
夜の雨心にホロホロ散る桜
閉ざされた耳に真実だけがある

米子市　八木千代

信念へ廻り道した日を悔いず
麻痺の子の歩巾へ鳴らす遍路鈴
病棟の朝の話題は花へ寄り
療養へしみじみ花の美しさ

島根県　榊原秀子

一矢報いねば止まぬこころと戦う日
口さがない人へ一線引く話
おひなさま昔話がつきませぬ
盃へ花びら一つ浮く風情

松江市　中川晃男

表彰状一枚三十年の職を退き
寄り添うて別れて添うて塗り箸の
毒舌を素直にくるむ日のぬくみ
仮面の下の心のひだに女老ゆ

西宮市　若林草右

一日のリズム崩して孫は去に
新聞は黒枠から見る程に老い
コンタクトレンズ夢は何色春の色
ロッキード事件
握った手開けば金はもう消えて

伊丹市　樫谷漫柳

娘の新居スープ届かぬ距離に建ち
釘一つ打てぬに孫に竹とんぼ
夕刊のような余生を送りたい
あぶられてするめは急に世をすねる

倉吉市　奥谷弘朗

見て歩くだけの桜で足りる妻
小役人自適の夢に程遠し
理不尽なことに寛容過ぎた感
倖せは後押す妻がいてくれる

和歌山市　垂井千寿子

波風は立てず血圧ちと上り
鯉のぼりよごれた風によく跳ねる
ばあちゃんと呼ばれて夢が奏えかかり
嫁が来てやれやれ空虚の中に居る

八尾市　内海幸生

ていねいに今日を送ろう明日がある
足踏みをすれば遮断機揚りそう
ガラクタの山嘲笑うてるカタツムリ
堂々と出てくる遅刻は信じられ

枚方市　宮川珠笑

サラ金に追われる人もいる花見
精一杯咲いた植木の媚を買う
棟梁は飲めず唄えず頼られる
春雨へ木々の芽音を立て動く

八尾市　大路美幸

花便り知らず手形を追いつづけ
ポケットの重さは硬貨のせいでなし
祈りから生れた鳩は裏切らぬ
漬物の石の形で母老いる

和歌山市　若宮武雄

いいことがあり春雨にぬれてみる
雑草の地味に咲いている自信
青空の鳶の自由はまん円い
限界はしずか瞼を閉じるだけ

守口市　村田瓢太

かつら冠っても顔の小皺をどうしよう
孫の電話取り合っている老夫婦
強いのに次々食われてゆく摂理
殉教の悲史を語らず城聳え

（天草にて）

松原市　玉置重人

自己本位などと他人を哄えない
寸暇さく花の京都で雨を賞で
煩悩があるから楽しい春である
大あくび一つラッシュの中に消え

大阪市　吉田圭井堂

金策がついたか鉄骨少し伸び
駅蕎麦で妻の不貞寝を嚙み殺す
それなりに徹した人の恐ろしさ

鮎の解禁

初鮎をかけて今年を意識する

大阪市　江城修史

子が敷いたレール錆びぬ日を願い
溜息を置いて居職の灯り消す
古稀すぎのロマンの噂のうす汚れ
甦える想い出抱いて孤に還る

泉大津市　村上春巳

バス降りてガイドも海へ深呼吸
合格の顔で賽銭箱に立ち
補聴器で息子のうわさ確と聞き

ライターも上役と知る火をともし　松江市　恒松町紅

地球が毀れそう十一屯車走る
印相もなく三十年の出勤簿
アスファルトに負けまい路肩土筆伸び
木蓮を賞でて出雲に春遠し　大阪市　天正千梢

別な物さしで計って満足し
もう一人の私　負けておけまけておけ
鬼の洗濯板新婚さんふにおちず
生々楽天祝吟
生々楽天二部合唱の虹は冴え　大阪市　川口弘生

天寿などわからないから夜がねむれ
あの人もあの人も居て今日がある
握手した手洗われてるとは知らず
誕生日やっぱり降った雨男　島根県　小砂白汀

割箸のけがれを知らぬ音で裂け
ゴールデンエージへ血圧沸騰す
愚痴さらけ出せば先方さまもグチ
錯覚をほどよく詰めてる包装紙　東大阪市　斎藤三十四

○・三要眼鏡とそっけない
ふんぎりへ妻の尻押あてにする

年上の女房で男温う居る
俺の値打さしずめ保険の二千万　大阪市　神夏磯道子

満ち足りて今日ふり返るしまい風呂
退院も間近心も花に染む
信じよう明日は誤解に笑うかも
ピカピカに磨いて何かに堪えている　大阪市　中川滋雀

あやまちを悔いあやまちの旅ごろも
湯帰りの鞭声粛々春が満ち
左手の値うちは怪我で教えられ
迷い子の片言お家が遠くなり　八尾市　香川酔々

十字架のキリスト見てる膝枕
ケロイドの町に小さな花が咲き
たけくらべ花は見事な満開で
運命線ここで切れてる崖っぷち　和歌山市　内芝としよ

満開を合せ鏡で見せる病床
信じあいふれ合う心にある光
善意の席ゆずる気持にいる勇気
太陽は主役の貫録今沈む　守口市　野呂右近

掃除機に不満も吸わせたらしい顔
年頃の娘を持つ故の低姿勢

花びらが肩に止って話しかけ
ゼネストの線路を叩く春の雨

大阪市　西出一栄

五分咲きへ無性に旅がして見たく
胸の炎が少し落ちつく春の雨
指切りを深いちぎりと嫁き遅れ
帯に短かし襷に長い一万円

大和郡山市　森田カズエ

爪染めて伸して女独り居る
オーバする予算我が家も進学期
コブラ手で摑かむテレビへ箸を置き
耳が鳴る耳が鳴るなる夜を独り

大阪市　山川阿茶

ビニールの花とは知らず春雨の
沈思黙考いつの間にやら寝てしまい
年輪のいぶしかかった恋をする
残虐性先祖の猿から貰いうけ

貝塚市　野坂つき子

追憶の中で手枕されていた
割り勘のコーヒー恋など寄せつけず
適当に貯めて青春謳歌する
おもわくがあって割り勘やめておき

富田林市　岩田美代

十六の悩み聞いているチューリップ
垣低う住んで木蓮匂う女

おぼろ月どんな明日になるだろう
和む日で一張羅の心持ってます

富田林市　和田維久子

熱き日を想う墓石の下の冷え
能力の限界左右の途迷う
愛されて愛して小さな嘘一つ
三合目麓でもよし我が倖よ

島根県　大森孝華

年一度釣れた魚が誘いに来
馬鹿を背に今日も世話好き急ぎ足
今日を散る花の命を舞ってみせ
渦しばし忘れて雨へのみあかし

守口市　羽原静歩

雑用に追われて老いの夢がなし
ふり返る誤植の過去のあれやこれ
リンゴ丸かじり童心はじけそう
着物ショー女心は揺れに揺れ

倉敷市　野田素身郎

孤高持するが如くに過疎の山桜
血圧のことには触れず花見酒
便利屋として使われ万年課長補佐
五月晴れ君スラックスを脱ぎ給え

玉野市　小谷仙山

夫婦の溝埋めるシャベルを借りに行く
良心が目ざめて首を横に振る

田舎者ですと前置してかかり
夫婦して何日か崩れる積木つむ

岸和田市　植山武助

娘のくれたネクタイ締めて娘と歩き
岸壁の母まだ三十年を生きている
一廻り大きく見えて里帰り
甘やかし過ぎたも父のせいにされ

鳥取市　大塚豊生

猫までが女の膝を恋しがり
これからを老いてはならぬ靴磨く
栄進の椅子へ左遷も来て握手
まっすぐとまっすぐ肩を触れもせず

高槻市　福田丁路

大空が微笑む春の草に寝る
玄関に花一輪のお家柄
人を皆敵と見立てて奮起する
ペラペラと心くすぐるコマーシャル

笠岡市　松本忠三

来賓の椅子だけおおいをかぶせとき
頸だけをつつこみここも満員か
せめてもの愚痴が昔を懐しみ
墓参りついでというも若者か

岡山県　出原敬一

名のり出て世の冷たさも言うて泣き
菜の花の天に一条誰の訃ぞ

愛の差に負けた日からの束ね髪
老母在す道を私服に手を曳かれ

出雲市　原独仙

花の句座隣りの三味が耳ざわり
福祉の宴葉桜でよし花でよし
白眼視中を上司へ酌ぎ廻り
金婚の峰へ脇見もせずに着き

神戸市　仲どんたく

年金の来る日指折る日なたぼこ
合格の子と母が吹くファンファーレ
軍歌今日右翼のラッパの中で生き
無理だよと云いたいブーツの中の脚

西宮市　島居百酒

仕たいことあれこれあって物ぐさ屋
南船北馬また戦談をむしかえし
真夜中を横切るレールに魔の光
お遍路をしてみたくなる齢や春

豊中市　戸田古方

四国を旅す（四句）

何番の札所でわかるバスの客
人間が匂って来ても大自然
安いのもおますと市の端に来て
老夫婦一服飴湯が相応しい

呉市　槇田英詩

嫁の座で今日も忍の字書きつづけ

自分だけ良い子になった自己嫌悪
神様にすがるその手を二つ打ち
人悲し医院に忌中札下がる

生駒市　草深酔升

ふるさとの波音聞こゆ蟹の味
夕映に似て生甲斐を持つ余生
虎の皮昔は何をした人ぞ
持つ悩み持たぬ悩みが生むニュース

堺市　高橋千万子

手首までポストに入れて恋の文
ジャンケンに負けて小猫をすてに行く
高速に急がば廻る道もなく
言い足らぬこと駅までと母誘う

尼崎市　黒川紫香

白い北海道

空駈ける津軽の海に光るもの
海鳴りの音知床は陸の果て
たたずめば摩周湖冷たい顔でいる

鶴の里

貴婦人のよう丹頂が舞い下りる

鳥取市　河村日満

雑兵に間違いはない人生譜
病妻の言葉指令の如く聞く
愛だけがいのち女のいま燃えて
指繰って夏には孫が抱ける幸

下積みの農夫に賜う春の空
紅い椿頓死のように落花する
赤信号の向うは美女の通る道
膝射ちの姿勢でカメラ向けてくる

鳥取県　鈴木村諷子

金堂落慶妻の写経も交ってる
あいまいな返事で男送り出し
腹の子の父たしかめる月をくり
腹這いでポルノ読む子の生ま返事

高槻市　若柳潮花

限界を悟りこころの目を開き
有終の美へ奮発の総入歯
寝たきりの布団も春の陽を吸わせ
泡沫の恋へ青春すりへらし

和歌山市　沢山福水

人命の尊さ今朝の記事に泣く
どんな子になるやら我が家の鯉のぼり
腹と腹目と目で対談続けられ
一円の価値は転げたまま眠り

鳥取県　清水一保

女なる悲しみ男の嘘に酔い
信念がたかが二合の酒に揺れ
達筆じゃあなかったた虚子の句碑に佇つ
兼六の陰陽石を妻に説き

鳥取市　両川洋々

富士毅然として大空に君臨す
人々の心も四季の色に染み
柿落葉クルクルクルと秋刻む
浜砂の一粒ずつに宿る詩

岡山県　直原七面山

肩書きを言うまい僕は病み続け
衣替する初夏へぼつぼつ病み上り
試歩に汗　闘病のまだ続き
メスの味知らない人がうらやまし

高槻市　山田季賛

抜かれる歯だからなかなか出かけない
夢に見た春はも少し暖かし
出稼ぎの苦労はいわぬ花の宴
ゴキブリもさっさと越して来た新居

愛媛県　村上旭童

長足の進歩　地面踏んでますか足
イイナとさえ思う或る時の矛盾
子には子の主張そんな仕草もして見せる
川柳に住んでる自分を批判する

大阪市　神谷凡九郎

曲げられぬ真実があるひとり言
靴の紐締めてる今朝のひとり言
背を向けて涙拭いてるひとり言
身を切って足らぬおとこのひとり言

倉敷市　水粉千翁

帯解いた手で折詰の蓋を取り
出稼ぎの帰り地下足袋新を穿き
満員の客に悲鳴を上げた夢

今治市　原田一風

疑われた善意やり場の無い怒り
廃駅と桜は知らず咲きほこり
鳩の餌を売ってる老婆に鳩なつき

東大阪市　竹中綾女

吹く風を心の友にひとり旅
病闘の春のひざしへパフの音
退職へ春の日だけが暖かい

今治市　越智一水

しんがりがとうとう寝こんだ流行風邪
兄貴々々と単細胞たかられる
恋という心理描写瞳が燃える

松江市　舟木与根一

白髪染妻の若さに引きずられ
不信感ぬぐえず金でかたをつけ
恐竜も亡んだ人類おごるまい

美祢市　安平次弘道

雨によし晴れてまたよし名ガイド
倒影の塔を砕いた落椿
譜面台恩師が生きてる鞭の跡

京都市　松川杜的

大阪市　黒田真砂

ただ酒で酔うて素面を崩さない
パフ途中で止って春の肌の荒れ
真実を語る敗者の目が澄んで

大阪市　藤田頂留子

小雨今日春新緑の水化粧
人知れず悟って散りゆく山桜
子の土産はなさず屋台の酔い気分

神戸市　中村ゆきを

親鳥の羽音きこえる塾ブーム
灯を消せば　なお独りなるみみず啼く
独酌の湯呑の模様もいつか褪せ

鳥取市　小林由多香

二日酔いしてる息子のたのもしい
うどん屋の味姑も出しきれず
おもちや箱子は子なりに整理する

京都市　山本祇風

デモにいるわれ見る人の顔けわし
合格の通知で改築無期延期
定年を待っていそいそ旅支度

京都市　都倉求芽

月末はまた点滴の要る家計
嘘と嘘どっちも酒に混ぜてつぎ
タレントにのぼせて恋はまだ知らず

岡山県　白岩文衛

陰影をわが自画像に加えゆく

一片の自負心雑魚も向きを変え
小火騒ぎ僕より度胸のあった妻

大阪市　西川誓二

一泊の旅温泉は湯が溢れ
失言の波紋に慌てて善後策
ポケットに入る金なら高が知れ

和歌山市　吉野富子

不況風渡る世間は鬼ばかり
まだ燃える火種かくしている話題
正夢かも知れない朝の重い靴

平田市　久家代仕男

ポケットにトリスひとりで来た花見
山椒の芽を待ち佗びし床に臥せ
執務中妻の電話へ無愛想

出雲市　板垣草丘

刎頸の仲で証人くずれない
他人の山　根まわししとく木を探す
朝八分夜満開の日の句会

岡山市　川端柳子

大阪の水に馴染んだ急ぎ足
年中行事もう来る頃が泣きにくる
目を入れて口をきいてる顔になる

岸和田市　葛城伊三郎

正論を述べれば上司横を向き
倒産へまだいどむ気か赤い旗

不況でも桜は同じ色で咲き　米子市　増田竹馬

一と筋に賭けて悔なし舞扇
躓いた石にお礼を云うゆとり
何ごとぞ花を茶色にサングラス　兵庫県　河原みのる

邪魔ものとして人道へ追いやられ
自家用は鉄骨ですませとく大工
今フット候文で書いたろか　松山市　谷のぶお

止り木で飲むどの足も地につかず
赤ん坊の欠伸へ春の日があたり
桜草小さな春を庭の隅　名古屋市　吉田水車

必死のねがいは母の子守唄
かくれん坊自分の声が怖くなり
春幾年瀬われに自信の一句なし　柳井市　弘津柳慶

きゆりもう季節の野菜にして呉れず
助手席でプロポーズを待つ姿勢なり
シャッターを切るまで山門へよけて立ち　大阪市　河井庸佑

どうしても折れぬ娘へ親が折れ
親を泣かした通り子に泣かされる
山頂で一息入れて生き返る

子の無い夫婦夜長に五目する
たんねんに読んで新聞いやになり
言いたいこと云うて夫婦許しあい　岡山県　竹内翁童

神殿で夫唱婦随の指輪はめ
炎えきった後の茶漬のうまいこと
見すてられて桜これから実を結び　諫早市　原田明春

故郷恋うとき海鳴りの方へ向く
主婦として生活の四季を温める
躓けば自嘲の果てに詩が残る　柏原市　大峠可動

春闘の声高らかに電車止め
今日からは企業サイドになる辞令
黄信号走り出す人止まる人　東大阪市　本多清人

思慮深くラムネは眺め眺め飲み
手をつなぐ子ら皆虹の即興詩
遺産などない南米に叔母があり　東京都　山根白星

薄倖の生まれ孤独を悟り切り
陽炎をすかせば女の線も揺れ
女の香おぼろ月夜にすれ違い　和泉市　西岡洛酔

大阪市　神田秀峰

見掛けでは解らぬ心の奥を選り
不合理を小さなペンで訴える
無い袖は振れんと高飛車　示談けり

愛媛県　渡辺暁童

捨てかねたお色気をみる黒ずくめ
何となし赤飯にする老い二人
にごりえにさえ　大寒の冴え

藤井寺市　児島与呂志

気がかりな嘘が消えてる花だより
反射する陽に湖面の春がゆれ
過去残す瀬田の唐橋京訛り

東大阪市　落合思月

Uたんをする口実見付からず
さまざまなポーズある日の三面鏡
花束を贈られ七十てれくさい

松江市　岡崎祥月

今日からは嘱託という小さい椅子
人生街道夫婦手を取り手を取られ
生活を二三が三に切りつめる

島根県　西村早苗

カメラいま涙をかくす顔アップ
尾を振らぬ主義宴会は隅が位置
待ち切れず蛙土から春覗く

橿原市　岩井本蔭棒

あて逃げの聞き取り明日にする呂律
老残の肌にも起る静電気
倖せな余生ゆつくりペタル踏む

大阪市　室谷徹舟

孫の名が浮ばず婿と酒にする
職人がいらえば石が生きて来る
禁煙の決意へ妻は笑うだけ

大阪市　津守柳信

待つ事に馴れた女にある小ジワ
わざわいの口を他人の眼で見つめ
不況風自分で作る更年期

貝塚市　行天千代

月明り帰る夫婦を嬉しく見
来て見れば広告程に安くなし
鏡の中もう一人の私が居る

小松市　馬場魚山

甘たるい返事で熱いとこも見せ
ピーナツの証言嘘と分るうそ
ごね得の民赤旗にきて貰い

仙台市　川村映輝

春うらら屋根に登って見たくなり
豆腐屋も焼いも屋もカーでくる
愛嬌をふりまきさようなら市電

大田市　藤田軒太楼

粕汁の匂う窓辺に花の冷え
旅に来て山紫水明に地酒酌む

ゆるやかな動き万象春に酔う　唐津市　新岡回天子

僕の役誰も知らない馬の足
元祖始祖どちらが本家か解らない　八尾市　古川鶴声

真実を言えば首とぶロッキード
喚問の手ぬるさ筋書どおりなり　大阪市　村山光輪

残業がなくなり家計狂い出し
孫来るの知らせに机上移動する　尼　緑之助

夕桜　一本　築地松の家
くたびれた赤旗　小駅は花盛り
三木がんばれ受け皿がない
たいやきくんが合唱となる花見
評論家続出朝々のテレビ　浜田久米雄

年寄りに休め休めと雨が降り
満開の下で煩悩また迷い
老眼と拡大鏡で辞書をくり
老骨の骨の脆さを教えられ
力んでも常と変らぬ力瘤　本田恵二朗

確証を握る男の薄笑い
寺の坂梵字のように曲ってる

野仏へ苔慕い寄り慕い寄り
肩の荷をやっとおろせた六十路坂
骨休めする気ひととき馬鹿になる　正本水客

国後　歯舞　氷が光るばかりなり
ノサップ岬　舟に印つけて昆布漁を許される
夜来の雪戴せて流氷　岸に寄る
馬ソリの鈴　馬のたてがみ淋しくす
鶴渡る湿原の雪消えがちに　橘高薫風

妹に紙の兜がよく似合う
緑陰に炎さびたる春の塔　（室生寺）
松本波郎夫人を悼む（二句）
昨日見て来た長谷の牡丹は死だったか
おだまきが咲いてる紫の涙　川村好雲

サングラス賜いし顔をなぜかくす
母の声聞きたし墓に伏せしまま
母偲ぶよすが筍嚙みしめる
雨もよし心に蒼きしずく垂る
散り果てり余情は黙より外なきか　西尾栞

重文の兜の部屋の昼暗し
十二神将ハッタとにらむ瞳と出遭い
春の雨博物館の小半日

春の雨ドアーの鍵のあい難く
血圧にさわる放談して帰り

菊沢小松園

雑兵の裔　血統書は書かぬ
思い出に残る大阪の空青かった
命助かってから食物をさがす
温かな近い他人の手を見詰め
順調に行けば在学中になり

若本多久志

梳る髪の薄さに詩もなし
遺言へ書きたすことのメモふくれ
世渡りの流れに丸うなって生き

帰依しての十年宿業の深さ知る
浮き沈み老妻平然と常の顔

選者からのお願い

前回（S・四八年）選を仰せつかった時にも句箋の統一をお願いしましたが、まだ十二、三名の方が守って頂けない事を悲しみます。どうぞ、川柳塔句箋又は同寸法の紙型でお願いします。

次にご投稿は貴重な作品ですから明確に楷書でお願いします。更に誤字、当て字の無いようご留意下さい。本月分入選句の中での誤字、当て字は二十六字もありました。

不確かな場合は是非、辞書をお繰り下さい。

又、句意から察して「唄う」が応わしいのに「唱う」と表現される無造作は一考して下さい。妄言多謝。

若本多久志

近作

怒ってもエクボは同じ位置にあり
手形落ちたかとゴルフ場から電話
定年の眼鏡の疵も淋しかり

今治市　月原宵明

夜の駅泣いている娘と摺れちがい
茄子の艶出荷の朝の陽をはじき
ライバルが女で攻める手に惑い

上田市　金子呑風

文化とは灰も出来ない台所
冬空で唸ってみたい鯉のぼり
対話と協調緑の風と鯉のぼり

大洲市　米澤暁明

鉢に花咲かせ間借りはい出せず
程々にするには酒もいる勇気
豊作貧乏農夫にストの智恵がない

岐阜市　市川鱗魚

サザエさん一家に似てて今日平和
オバQにつき合わされる酔い心地
ロボコンを知らない父へ児の不満
家中で一休さんへ頓智づき

東京都　池口呑歩

がたがたの身にいつまでも鞭をうち
刃向いも心服もない頼りなさ
たい焼屋二軒になった味となり
元々は武士と気弱な子へ暗示

今治市　長野文庫

麻生路郎物語（18）

―キング喫茶店―

東野大八

庶民大衆の誤れる川柳観を正し、純正川柳の啓蒙を目指し「川柳雑誌」は巻を重ねた。

句席における熱っぽい路郎の川柳講演は、東に西にの川柳行脚をもって拡大され、川柳一筋に燃焼する路郎の川柳メモは、昭和四年以降過密の度を加え、昭和六年以降戦争まで山雨楼メモは真黒に塗り潰されている。

〔昭和五年〕＝筆者注・主要メモのみに限定した＝

○二柳子、緑雨と改号・山雨楼同人参加。

○裏日本から函館へ川柳行脚・第二回海峡親善大会出席・三太郎、錦浪らと帰途白河、東京、横浜に寄り多くの柳人と歓談、西念寺の柳雨忌に出席。

○十一月十四日河盛芦村翁逝去、行年65歳―水府いわく「関西川柳社創設当時奮った人、文字の美くしい謹厳な士であった」半文銭からも「僕も寂しい」との便りがあった。

於新京満洲屋旅館玄関路郎先生と柳陽氏・S9・3・17

○十二月十六日三太郎来訪、徹宵痛飲。

〔昭和六年〕―堺市立公民病院事務長

―**文学を軽んじ馬で裾野ゆく**―

―**恋の罠あの眼だらうか眼だらうか**

―**酒とろりとろり大空のこころかも**

―**十二月うれしい風も少し吹け**

○四月中入院・病気は私の肉体的慰安也

○「川柳のぞき」出版・路郎選句鳥平画

○八月三日付朝日新聞「天声人語」に川雑の句を全段でもって紹介される

○十月四日京都川柳社創立二十周年記念大会に出席・畝傍、飛鳥に遊ぶ

○松丘町二・三好革郎同人辞退

〔昭和七年〕純喫茶キング開店（玉出本通り三）

○新年号巻頭に「われ子規たらん」と題し一大抱負を語らんとしたところ、タイトルをみて妻が愕いてとめた。葭乃女史本社新春句会で「情熱の句に就いて」処女講演

○神戸新年句会で講演「爆弾を抱えて来る」椙元紋太氏社規により客員名簿より抜く

○四月金沢の産業観光博記念大会出席

○「川柳漫画行進曲」弘文堂より発刊

○関東・関西を一行四十名で行脚

○川雑百号記念「川柳の夕」朝日会館で開催・講演三太郎・水府・路郎・聴衆一千余人

○六月号より武玉川研究論講・省二・東魚・秋農屋

○関東川柳団歓迎大会で挨拶し「詩としての川柳の向上。事物にとらわれた川柳を遂うことを排し、生活感をとり入れた、自分の将来の指針はそれだ」と叫ぶ

○九日青田代議士秘書を兼務（一年後辞任）

○七月六日浅井五葉逝く

〔昭和八年〕

○一月号川雑創刊十周年記念特集・一三〇

頁の豪華版。光頭会支部（永田里十九）川雑奉天支部（江戸みつる）八東支部（平塚乱笑）野山支部（野山修一）玉造支部（清水白柳子）今治支部（渡辺暁童）今里支部（吉田水車）いづれも新設
○六厘坊25回忌記念大会（道頓堀クラブ）
○八月「喫茶新聞」毎月一回発行・麻生幸二郎（路郎）主宰（洋飲機関新聞）これは路郎が同業組合の副組合長および大阪府料飲業組合連合会役員の立場で企画された
○十月川雑東京句会開催（浅草並木倶楽部）剣花坊、久良伎、三面子百五十人出席
○九月二十六日愚陀、乱眈句集〝潮騒〟刊行記念句会（端の坊）不朽洞発行
○十一月川雑同人社友会で従来の社友制を廃し一列同人とし、旧社友を社務進行上評議員と称し、旧同人を理事と称することにした。（理事・翠夢・紀太・草楽・水車・かおる・里十九・二南・琴人・新水・閑生・雅幽・万よし—編集局緑雨・丹路・町二・山雨楼・鶴峰・葭乃・乱眈）
○路郎先生玉出洋飲食同業組合の組合長に推薦さる。また玉出衛生組合評議員当選
○「**俺に似よ俺に似るなと子を思い**」文芸春秋一月号川柳名吟の中に選ばる
〔昭和九年〕川雑事務所住吉区平野町西之町八三・橋本緑雨方に移す
○大毎にさかんに随筆を寄す
○一月きやり十五周年記念号に「川柳作家十五戒」を寄稿す=多読多作せよ、選者を選べ、右顧左眄するな、技巧に走るな、自惚れ禁物、器用で作句するな、努力を忘れるな、句なき作家となるな、自己を掘り下げよ、句の非凡を目ざせ、句で争え、句を捨てよ、識者を怖れよ、生命ある句を創れ、一句を遺せ
○新居浜支部（越智虹子）大鉄支部（植山九夫）伯耆支部（湯原美笑）簸川第二支部（尾添好郎）いずれも新設
○ＪＯＢＫから「満洲建国祭に因んだ放送座談会」に出席。（大阪市財界代表等）
○三月九日鮮満地方へ川柳行脚・京城・平壌・安東・奉天・新京・ハルピン・鞍山・大連・撫順・熱河を巡歴・三月二十九日帰阪
○四月きやり創立十五周年記念大会出席・四国支部聯合川柳大会（今治）出席
○六月ＢＫから「川柳披講と合評」の放送路郎、草楽、乱眈、新水、豆秋、山雨楼—水府、雲雀、小太郎、舟人、夢路、文久等が出席
○十一月川雑事務所移転、大阪市天王寺区上汐町一の五一増位汀柳方「たまむし」（通巻81号で終刊）川雑と合流。「漫画と川柳」富永興文堂から出版
〔昭和十年〕路郎四十八歳
○三男一歩学童に上る。四男洋死去
○山雨楼東京鉄道工務局へ転勤
○四月大阪朝日に「川柳の親心」執筆。近刊の「大阪人物誌」に私が両親にともなわれて大阪に出たように書いてあるが…
○二月号から日本名所名物川柳連載・雀郎選しげを画。十一月号にとんで四国の巻に五健選ならびに画
○一月前総務橋本緑雨祝賀の夕功労章授与
○行人会支部（平井春光）十三支部（浅野牧人）開設
○三月二十六日満州凌源の岩崎柳路夫妻帰国。四月七日歓迎句会、南紀白浜に招待
○三月路郎主幹大阪時事新報広告部長として入社さる
○森東魚株式会社間組入社
○七月路郎指導で阪大川柳会から「大川端」刊行。（不朽洞版）ＢＫから全国中継で「川柳の夕」放送。久良岐、三面子、水府、雀郎、路郎らが講演
○十月東京支部開設。福田山雨楼支部長
○十二月川雑京阪神支部連合忘年川柳大会を日本橋クラブで開く。一八〇名出席。講演「歳晩の味」路郎。「柳樽の精神」山雨楼

翌年の昭和十一年（路郎四十九歳）には、路郎の川柳一筋の生涯にとって画期的な一大

転換を示す「川柳職業人宣言」が行われるのであるが、次回にそれを詳記することにする。ともあれ以上のごとき川柳日誌が、山雨楼メモに詳記されているが、年毎に綴られたそのメモは、前記要約の量を大幅に越えている。路郎自らの執筆もあるが、山雨楼の筆蹟によるものがほとんどのようである。

こうしたメモを通覧していくと、路郎の川柳生活がかなり明確にみてとれる。その事件の中から葭乃書簡をひらいてみよう。

「父芦村は岸の里の家で、昭和五年十一月十四日私の母の三十三回忌の日に亡くなりました。それから私達は、玉出本通りへ移ってキング喫茶店を開業しました。これは決して家計の足しではなかったのです。世間を知る為の私の修業の場所と路郎が決めたことです。

人間嫌いの私が客に接することの難しさは川柳家の誰でもがよく知っていられる筈。店をあける前には、何杯かの洋酒をあふってからにします。勿論、女給も二、三人は雇っていましたが、まずお客の先手をうって、いい気分になっておかないと話のやりとりがスムーズにいかないのです。

業者が配達してくる洋菓子はほとんどが子供のおやつになってしまいますし、洋酒の消耗もばかにはならず、こんな営業ぶりでは、路郎のプラスになるどころではありません。路郎にすれば、とにかく世間知らずの私を、ぼちぼち教育していこうという腹づもりであり、そのための思いつきであったのです。このおかげで私も世間の裏をちょっぴりのぞき大人の嘘のいやらしさも知らされました。この喫茶店は七年程でやめました。

この店のおかげで、少しは無駄口もきける様になっていた私は、店をたたんだら、またもとの木阿弥で、一言も口をきかぬ、そして声をたてて笑わぬ葭乃になってしまいました。生来の根性というものは、どうしてもなおらぬものだとハッキリわかりました。

私は昔から四方八方からのサービスずくめで育ってきたので、路郎はそれをため直すために苦労をしたことでしょう。私はおかげで世間の裏というものも、世間の苦労というものも、チョッピリ覗いたかの様でございます。

「どうしてあんなにのんびりした気持ちになれるのだろう」

と思うたのが路郎が私へ対する興味の第一歩でありました。私は食いけ一本の娘で、身を飾ることも知らぬ女でありましたから、人からプロポーズされる様な条件は何一つ持っていなかったのです。唯一本ぬけたようなのんびりさがあった事は事実です。烈しい性格の路郎には、心をほぐす中和剤であったでしょうが、また派手に喧嘩のできる相手ではありませんでした。

路郎は「福寿草」の序文の終りに

「彼の女の生活は私を防波堤として、港の中の静的な日日に安住し切っていて、社会に対する抗議とか公憤とか云うものを持ち合わせない。従って句の上にもそうした厳しさ、激しさと云うものはない」

と書いています。実際私は幼いときから、誰かに寄りそうて生きていました。そのため、何くそ、という気概は少しもありませんでした。ですから私には内助の功などは薬にしたくもないのです。うるさくもない代りに、痒いところに手の届くような世話もやかないと云う不甲斐ない女に生れついているのでございます。拙宅に「鬼灯の赤きは人のためならず　井泉井」の軸がございます。（葭乃書簡）

路郎の鮮満の旅は、宿屋住いをして執筆したルポである〝鮮満ところどころ〟にまとめられ好評だったが、この旅で、満州鉄道の優待パスを贈った大島濤明は、つぎのような一幕のエピソードを川雀（路郎古稀特集号）に寄せている。

「先生は朝鮮経由で満州に来られたが国境の安東税関で所持品の検査があり、その姓が麻生とあるので、安東警察に連絡され、厳重な取調べがあったそうである。その頃日本では社会主義の取締が厳しく、当時の社会主義者の大物級に麻生久という人があり常に私服警官が尾行する程の要注意人物であった。安東の警察でも先生の姓が麻生だし、容貌も教授風というので、神経を尖らせて所持品は勿論、身体検査まで行ったそうである。それがため、折角の鉄道無賃に役立つパスの使用が全く不能となってしまった」

岡田　甫

誹風柳多留廿五篇研究

—（十一丁）—

紀内恒久・鈴木　黄・清　博美
青木迷朗・室山　三柳・八木敬一
西原　亮・入江　勇・岡田　甫

181　**在五の机に扇だのふくさだの**

紀内—「在五」は在五中将、即ち在原業平。業平は『伊勢物語』等に、色事の話が多いところから、美男のほまれが高く、現在でも美男の代名詞として使われている。従って主題句は、そんな美男の業平のこと、まわりの女性がほっておく訳はなし、机には女性からの贈りものでいっぱいであったろう、との句。

なり平ハついにくどいた事ハなし　安七・梅1

業平へ恋ざいそくが五六人　玉・17

入江—宮中の儀式に賜扇の儀があり、儀礼・遊芸に欠くべからざるものであった。貴族の遊戯として扇引・扇合があり、当時の公家は朝服着用においても桧扇を懐中したもの。プレイ・ボーイ業平に女たちが競ってこれを献上したと想像するのは、自然である。

岡田—賛。

182　**お妾のせうふ刀ハ切レるなり**

紀内—「菖蒲刀」は、端午の節句の飾り兼子供の玩具。「お妾の菖蒲刀」により、お妾に男子御出生を意味する。奥様に男子がなければこの子が跡取りとなり、お妾の御身安泰、それどころか権威は倍増する。このことを「刀」「切る」の縁語仕立にした句。

奥さまをしやうぶ刀で切なびけ　一〇・30

御めかけの手柄木ク刀だらけなり　一九・15

青木—賛。切れる筈もない木刀（菖蒲刀）を「切れる」（奥様に先んじて男子出生した権力）としたところが面白い。

西原—賛。切れ味万点であろう。

岡田—賛。

183　**南北に新都の出来る桃の春**

紀内—雛市の句。雛の形から公家、その住居（?）として雛市を御所に見立る趣向は多い。室町（十軒店）と尾張町が江戸の二大雛市であったところから、南北朝をふまえて、主題句は詠まれている。

北朝室町南朝尾張町　籠三・21

青木—賛。現実の都に対して、架空の都を新都としたところが面白く、南北二つに朝廷が出現すれば争いはまぬがれないが、桃の春の御所ではそんな心配はなく、平和でにぎやかなところが取柄。

娘娘南北朝の雛をたて　　拾四・28

岡田―贊。

184　よし野から兵庫へ仲人指をさし

紀内―「吉野」は芝居の見物席の一つ。「兵庫」は女性の「兵庫髷」。主題句は、芝居の見合。芝居見物を利用した見合の句は多いが、これは仲人苦心の作、即ち別々の場所に席を設け「ホラ、あそこの兵庫を結った女だが、どうだい」といった状景である。「吉野」「兵庫」と地名仕立にしたところがミソ。

青木―贊。『川柳江戸歌舞伎』に「吉野とは西高土間の行詰り松の後、役桟敷の隣にある場席にて、幕を引きたる時はその内に入り、日覆の花の釣枝など裏から眺むるの心にてかかる名称が生じた」とある。

吉野から見る釣枝は裏桜　　一一六・18

礎稿の如く、「地名仕立て」とも見られるが、「屋形船の吉野丸と兵庫丸の語呂合せ」とも考えられるが……。

室山―同。地名仕立てと見てもよく、青木説の船名仕立てと見てもよし。強いてとなら、青木説をとる。

入江―礎解に贊。舟遊山は「吉野丸橋町を根こぎにし」（明二仁2）というように、踊子を交えたどんちゃんさわぎで、見合どころではあるまい。

岡田―「吉野丸」は大船で有名だった。「兵庫丸」というのもあったかも知れないが記憶になし。芝居小屋での婚礼の見合い説でよかろう。

185　行灯へうつさせて娘爪を出し

紀内―娘・爪とくれば琴である。柳句において、娘と琴は切っても切れない縁があり、琴の名手ということになっている。

客への接待、また客の所望で、弾かされるのであるが、はずかしがって仲々やらないというのが、主な趣向である。

さて、主題句であるが、「行灯へうつさせて」がどうもはっきりしない。

あんとんへうつして仲人いとま乞　　八・11

これもはっきりしないのだが、岩波文庫本（山沢英雄校訂）索引には「行灯へ移して」とある。従って、主題句においては、やっと琴をひく決心をした娘、部屋が薄暗いので「火を行灯にうつさせて」おもむろに爪を出すというようなことか。

青木―贊。「行灯へうつさせ」たのは、礎稿に言う如く、「灯を移させた」のであろう。嫁が琴の上手と言っても、盲人の名手とは違い手許が明るくないと、弾き違う恐れが多分にあるので、右の次第になったのでしょう。

西原―暗い方がよいのである。恥かしいのである。即ち、宴会などはローソクであり、たいへん明るい。ために、琴をひく嫁女のたのみで、わざと行灯にうつしたという意。

鈴木―現在と違って、琴・三味線等の遊芸は全て暗符で修業したと思いますので、琴を娘がひくにも暗い方がかえって上手にひけたと考えます。

岡田―西原・鈴木説に贊。暗くする。

186　しるよしへかりにいにけり金屏風

紀内―山王祭・神田祭の際、その神輿行列の通り道となる家、店では、紫の幔幕をはり、金屏風をたて、その前に御神酒を出したという。柳句では、この金屏風は借物ということになっている。

主題句も、その借りものであることを『伊勢物語』の「春日の里にしるよしして狩にいにけり」の文句取で表現した、それだけの句。

青木―贊。金屏風は日常品ではないので、富豪・旧家でないと所持していない。だから祭礼の時には借りる事になる。

岡田―贊。

187　娘のしやくちつとゝいへばちつとつぎ

紀内―この場合は、娘といってもまだ娘入したての頃であろう。酒席などには余り出たことがなく、まだ接待にも慣れていない。客が遠慮して「ちょっと」というと、すなおに、「ちょっとしかつがない」。その初々しさとはずかしさ、うぶさが表現されている。

盃をまん中へ娘さしてにげ　　一二・21

青木―贊。娘の初心さをたくみにとらえた句。

盃を宿なしにして娘ハ立チ　　笘二・39

岡田―同。

川柳研究家阿達義雄博士と私

石崎柳石

阿達義雄博士が江戸川柳の研究の大家として名高いことは喋々するまでもなくご承知。名著「江戸川柳の研究」はたしか之が博士論文だと拝察する。古川柳と筆者などは用いているが、江戸川柳と冠して称えられたのは博士の創意ではないかとも憶う。「庶民と江戸川柳」「川柳江戸貨幣文化」「川柳江戸花街風俗」大名・庶民の家紋に関する著書等古川柳を研究するものにとっては有益適切にして誠に有難い著述である。

近頃、江戸川柳を溯って、雑俳の研究も盛んに行われており、之が雑俳大辞典も刊行されてもいる。古川柳も、今は「万句合」の研究が盛んで、故岡田三面子博士の御苦心集蒐の万句合が、遂に水木真弓教授の手に渡されて（月刊川柳「ひろしま」誌、「古川柳と岡田三面子」只今連載の拙稿参照）之が研究となり、引いで畏友山沢英雄氏校訂「柳多留」廿四篇五冊、「柳多留拾遺」十篇二冊（岩波文庫本）が上梓されて、広く大衆の耳目にふれて普及するようになった。

故井上剣花坊氏が、大正十二年九月一日の所謂関東大震災の折、五四才の同氏が、岡田三面子博士から借用されていた「万句合」の写本一冊を抱えて身を以てのがられたことは「井上剣花坊句集」（昭和十年八月刊）にも記るされている。剣花坊氏著「川柳を作る人に」（大正八年九月刊）「江戸時代の川柳」（昭和三年二月刊）などには雑俳にふれても述著せられている。

武蔵江戸の住、藤原入道久良岐と署名された「川柳久良岐点」（明治卅七年十二月刊）「川柳梗概」（明治卅六年九月刊）には、矢張り、東都前句万句合判者の連名なども記載されている。柳誌「青柳」第二巻四号（明治四三年四月刊）には、岩本震五子氏「古川柳研究は学術として活学か死学か」が記載されており、また花岡百樹氏「川柳史（一）」が記載し始められて、「万句合」について言及されている。同誌第二巻三号には、蛙骨氏の解説で、口絵に万句合取次看板の絵がある。因みに、「川柳花束」（市民詩社発行、大正七年五月、第一巻四号）岩本震五子氏は「古川柳正解会」について述べ、久良岐社からの柳多留の研究から今井卯木氏主催のハマでの研究会を紹介し、相集って研究しようと提唱していられる。

前書が長くなったが、本題にはいるとしょう。私が十年間の愛媛県今治市住に別れを告げて郷里広島市に帰って来て、皇紀二千六百年を記念して当時の名称広島文理科大学国文科へ入学したのは年齢卅才頃であった。三児の父親でもあった。折から空襲警報下に、卒論「川柳論究」二冊を黒暗幕をたれた部屋で書き綴ったことも今は懐しい思い出である。このことは、故森雞牛子氏が、その柳誌にすっぱ抜かれて書かれているので今は厚つかましくも書くのである。故西島〇丸氏の御子息も同年期の卒業で卒論が御尊父ゆずりか古川柳に関するものであったことも、雞牛子氏は紹介された。大学三年在学が、戦時中とて二年半の繰上げの卒業となり、頃九月で、就職先も無く困り切ったが、やっと友人の世話で市内の高校に就職したものであった。

その頃、詳しく書けば昭和十八年一月五日の、阿達博士のおたよりが保存されている。私信を紹介し書上げるは、誠に失礼とは思うが、ここにお許しをお願して全文（端書）を掲げさせて頂きたく思う。

「謹啓、早々に賀状有難うございました。本年度の貴殿の御活躍を祈ります。十一月号の玉稿『平田篤胤と川柳』は洵に得難い資料を公開して下さいました。古川柳に於ける軟

派的ならざる方面の探究を私共大いに努力しようではありませんか。『松浦侯と川柳』について私もいささか心がけていますが、何しろ通貨志・物価志・金融志等が未だなかなか続くので紙面をさいていただけさうにもありません。

昨年四月から師範に転じまして、万葉や古事記の研究に追われ、川柳の方面はさっぱり進歩がありません。（中略）

卒業論文『川柳史論究』、ほんとに痛快です。私も川柳をやりかけたのですが、原本が見つからず、近松にしてしまひました。其の中に御研究の御一端を伺はせて下さい。

時勢の関係か知りませんが、古川柳の研究書はさっぱり現れませんが、貴殿など一肌ぬいで下さいませんか。

どういふものか今迄雪の余り積らなかった新潟にも雪が三尺もつもりました。この分だと高田や長岡あたりは一丈以上にでもなることでせう。輪講はいつも怠けてばかりいるので残念ながら『不明』居士や『贅居士』にばかりになっています。

御健斗を祈ります。輪講はお送り致します。」

極めて正しい細字で書かれていて、お人柄が偲ばれる。私は未だ拝眉の機を得ておらぬが懐かしい思いで一杯である。未だに呉下の阿蒙で、汗顔の至りであるが、老骨の余生を古川柳研究に捧げている。広島の原爆投下（昭和廿年八月六日朝）にも奇しくも生かされて今や古稀の齢を迎え、年頭に、

生かされて生きのびて来て今や古稀

の句を年賀状に認めたものである。

却説、書中の「平田篤胤と川柳」は、文理大の国語国文学会報「昧爽」第十七号（昭和十五年七月）に、これを発表して後、筆を加えて文を錬り、同じ題で「古川柳研究」誌第四巻十一号（昭和十七年十一月刊）に発表した拙稿である。学会の研究誌には「万句合に就いての考察」（文学探究、昭和廿四年第五号）の論説がある。次いで学会誌（国文学攷・第十九号、昭和卅三年三月号）に「川柳から狂句へ」の題で学会研究発表したものの梗概が記載されている。

「松浦侯と川柳」は、「川柳雑誌」第十三巻五号（昭和十一年四月）に発表したもので「川柳と松浦静山侯」と題し、次いで六号、七号と連載されている。因みに「川雑」には、拙稿「枕草子と川柳味」（昭和十一年一月号、私は同誌の同人であった）「俳風柳多留の題名に就いての考察」（昭和廿三年、第二六六号）を載せて頂いている。これの静山侯の著「甲子夜話」正続二百巻、後篇八十巻から記載の古川柳を選び抜き出して論及したものである。今治市の図書館から借本して珍らしく殿様が川柳に関心を寄せているので紹介したものである。新年号に載せて頂いた思い出深い論説である。これは後、阿達博士著「江戸川柳の研究」の中に静山侯の掲出句数などが詳しく記載されている。「俳風柳多留の題名についての考察」は、広大国文学会での研究発表に由るもので、これを記述したものを印刷にして「川雑」へも送ったところ、麻生路郎師は悦ろこばれたもの、それは原爆で消息不明だった私が生きていたのが知れたこともある。この論説はまた菅生沼畔雅契が「かも」誌にも最近転載されたので、補説をして山沢英雄氏説の紹介もし、之に対する意見も記述してある。

「輪講」とは、「古川柳研究」誌上において「柳多留七篇輪講」であって、参加執筆者は、山沢碌々、比企蟬人、阿達夜潮音、丸十府、大村沙華、石崎柳石の六名に依るものであった。今に懐かしい方々であるが、未だ拝顔をお一人も得ておらぬ。残念至極である。ひとりよがりの解など誠に駄労解であって、今に思えば厚顔汗顔の至りであった。今に文通している方は、山沢英雄氏・大村沙華氏の御両名であるが、安達博士はあれ以来とんと御無沙汰つづけで、御無音御無礼の段はお許し願いたい。広島の地にて御健勝御清祥の程をお祈りしております。

（昭和五一年四月十八日誌）

あなたも奇術師になれます

（規則書呈上）

奇術師の帽子が
ほしい子供の目（カズエ）

大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内
関西奇術教室
TEL (271) 七一二八

書評

中島生々庵　中島小石共著

「生々楽天」

戸田古方

「兄貴」というと何だかヤクザめいたいい方だけれど、生々庵さんは古方、私をほんとうに弟のように可愛がって下さっている。

昭和二十二年、居を北摂に移すまで南に住んでいた私を昭和十三年七月、松坂クラブの川柳道場へ連れていって下さった。私は路郎先生から、「川柳は人間陶冶の詩」と教えられ、川柳道へ入門さして頂いた。生々庵さん入門、数ヵ月のちのことである。

「生々楽天」は編年体に並んでいる。

〝桃われも結わせたしハイヒールもはかせたし〟

〝死にますともヒス第一巻の終り也〟

机を並べて作句していた頃の生々庵さんの呼吸を感じ、思い出す。

昭和三十六年頃までのところで、課題吟とおぼしき句に沢山お目にかかるが、真面目に忠実に励まれる姿を彷彿とさせる。だが、

〝手本通り書いて師匠の気に入らず〟

画道を詠まれたものかも知れないが、そろそろはっきりしてくる個性、路郎先生の導きによって健かに育っていかれる。いわゆる感恩句、先ず母の句から。

多久志さんが父母恩重経を引用しながら、その二三を「生々楽天」の序において紹介していられるが、私は次の句を推す。

〝俺は医者だそうして母の子でもあり〟

遠く郷里の病む母上を思われる孝心以上のものに頭が下がる。

母への詩について、師の恩、側近にいて、その並々でないことを屢々見聞した。

恩の詩は愛の詩に拡がる。衆生の恩はいきとし生けるものに及ぶ。

〝枯れてから又簑虫の役に立ち〟

〝子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち〟

〝俺の血を吸うたローマの蚊の行方〟

〝叩こうとすれば蠅の目に秋がある〟

〝一声出して見たいとかまきり身構える〟

〝言い分もあろうに古靴無口也〟

〝引き出せばさざえの尻っぽすなおなり〟

路郎門の一茶、大先達須崎豆秋さんの句境にも見合う佳句に佳句。

一転、再転。

〝阿弥陀さまきっちり閉めたらせつなかろ〟を経て、

〝無に徹し無に帰す君を尊しと見る〟

巡礼の旅に出て、白骨になるまで見棄てられていた故武部香林さんを悼む句である。大万のお座敷でいつでもお眼にかかる次のも人間愛の句

〝可愛らしい目になって来た酔うている〟

そして、悟道へ。大柳人生々庵さんの醍醐味。

〝割箸を拝んで棄てて旅終る〟

〝一粒づつ頂くように雨を待ち〟

〝贅沢は拝む心を忘れさせ〟

〝足るを知ればもう倦怠がしのびより〟

生々庵さんは佐賀門徒の家に育ち、大阪鰻谷の診療所で泊まられた翌朝は必ず北御堂への朝詣りを欠かさず、また、絶えずポケットに数珠を離されないとも伺っている。そして

〝今年も無事に枕木の役果したり〟

〝祷ることないので楽しお元日〟

と至福を味了されているのである。

入門のはじめ、「生々楽天」一四頁、昭和十三年のところに次の句がある。

〝初恋も二の恋もなく尉と媼〟

喜寿と古稀と金婚と三つの寿を重ねて祝われる今日を、すでに三十八年前、予見、スケジュールされていたのだろう。

生々庵さんは戯で、自ら婦唱夫随といっていられるが、それは口先きだけではなく、誰にも負けない真の愛妻家、これは疑いもなく正に真実である。

〝うたた寝の妻の素足をじっと見る〟

〝とんがった妻の寝顔に老いが見え〟
といういたわり、思いやりは
〝ある時は妻の寝顔も神々し〟
とエスカレートする。
小石さんの
〝お手洗主人はバックもたされる〟
などは極く自然。そして、生々庵さんは
〝伺いを立てると妻の眼がけわし〟
と恐妻家にもなる。
だが、小石さんは内助の功というか、生々庵さんの最善の協力者である。小石さんは
〝お花見へ往診かばん提げあるき〟
〝医者稼業まだ飲みさしで立たされる〟
正に、生々庵さんが手離していっていられる賢妻良母そのものである。やっかいな大きな坊やを合せて四人の名医の母御である。
小石さんは、外柔ながら、その批判精神は
〝我れ女愚痴の多きをさとりつつ〟
そうと、さとりはするものの、
〝二次会よなどとぜんざい喰べに入り〟
〝女の一生しゃべることと産むことと〟
とウーマンリブではないウーマンリブは厳しい。
〝片手落ち神は女にだけ産ませ〟
「生々楽天」、生々庵さんの部、最後の句
〝ばあさまも古稀かと喜寿が驚いた〟
に見る満ち足りた生々庵さんの和み。舎弟古方はこの句を、光栄の書評の止めの句とさせて頂く。
生々庵さんも小石さんも、まだまだ、じいさんでも、ばあさんでもない。元気矍鑠たるものがある。その矍鑠は、自らを喜びをもって、余裕をもって、じいさん、ばあさんといえるところからきているのであろう。
生々庵という雅号を今日まで「生々流転」からだとばかり思ってきた。そして、「生々楽天」に出合った。実に、明るくも、嬉しい言葉である。
それこそ、米寿、白寿を超えて、「生々楽天」をおふたりで享けていただきたくて、一杯である。
画業については批評を略させて頂く。

古方の兄貴、生々庵さん、この「生々楽天」は生々庵さんのはじめての句集である。古方が入門早々、時流に踊らされて詠史に走り、昭和十五年、路郎先生のお眼鏡を経たとはいえ、「川柳二千六百年史」を上梓したのに反し、入門後、三十八年にして、ここに、小石さんとご一緒に「生々楽天」を世に問われている。正に、孜孜として、川柳正道を真一文字に精進を重ねられた成果である。路郎先生ご在世中の作は勿論、先生の厳選を経た佳句であることは申すまでもないとしても、それ以後は多くは自選でなかったかと存ずる。今回、水客、多久志、栞、好郎、小松園、薫風、一三夫等の盟友の手に選句を委ねられていることに大きな意味を感じると共に、この「生々楽天」の中にこそ、路郎先生の遺訓「生命ある句を創れ」が実現され、柳史上永遠の金字塔と輝き残るであろう佳句の存在を確信するものである。

生々庵さん、小石さん、おめでとう。

ふるさとの川柳ニュース

八木摩天郎

◎第五十二期堺市成人学校が堺市教育委員会主催で五月十八日から七月六日まで堺市榎小学校に於て開設され、川柳講座が設けられ川柳の講師に委嘱されたので堺市文連協会から私と堺番傘川柳会長梶川雄次郎氏と講師を受諾、私は川柳の昔の歴史の明治以前の古句時代、梶川氏は新川柳を時代と分けて講義し、なおこん度は川柳講義よりも、川柳作句に重点を置いて句会等は河内天笑、中田たつお両氏が当って興味本位に終始する計画で、川柳講座が始めて開設されたのが第十三期成人学校の時、岸本水府師以来二十年目、私が講師に出向いたのが十三年前、川村好郎、榎本聡夢両氏を煩したのが十年前で十年振りの開校講座である。因みに、毎週火曜午後六時から二時間である。
◎堺市立図書館が開設されてから本年は創立六十年に相当につき堺市で印刷された文芸誌が展鑑される事になったので、六月五日午後一時から「堺川柳会句報」が創刊当時から出品される。なお、当日回顧座談会がある由。

—同人吟—

秀句鑑賞

——前月号から——

橘高薫風

急行通過助役は花の下に立ち　本多　柳志

誠に美しい絵のような句だ。安全確認のために立つ助役のしゃんとした背筋に花が散る。

遺作展舞妓は年をとらぬまま　仲どんたく

生身の人間は死ぬ。芸術作品の生命は長い。しかも、モデルは誕生のままの姿を保つのである。どの方面であろうと作家と称する者の心血を注ぐ所以はここのところにある。

春を病む少女は胸に絵を溜める　河野　君子

部屋に籠ったままで居なければならぬ者はさまざまの思いをめぐらせるものだ。絵を溜める、とは云い得て妙だし、少女に最もふさわしい語だ。川柳塔にこのような作品が増えて欲しく思う。

今の世に当てがい扶持と言うお布施　金井　文秋

国民の名に於て交通ゼネストを打ち上げ、給料のアップを要求するのが、今の世なのである。その点、お布施などもあなたまかせの一つで、ほんの足代ほどの額が多く、寺は稽古事の場代ででも稼がねばならないのだ。

曲り角の蟹に重たい鋏です　嘉数千代香

人生の岐路に立つ私、判断の分別がつきかねる程に悩む。それは丁度、蟹が大きな鋏を曲り角では持て余すようなものだ、と云うのである。

こう云う喩えの出来る作者は、童心のように自由な、想像力豊かな人柄だろう。

颯爽とビリも卒業式に出る　野田素身郎

中学や高校の卒業式に出て、「あの子はよく卒業出来たものです。」と教師が述懐しているのに出くわすことがあるが、本人はちっともめそめそしていない。教師に、「ありがとう。」などと快活に、お祝いの言葉の返礼を交わしているのも、真実味にあふれていてほほえましいものである。

日溜りに寄って焼香順を待つ　竹中　肖二

盛大な葬儀ではない。庶民の町のありふれた家並の中でのささやかな告別式の点景には死というそ寒い雰囲気が出ていて捨て難い味がある。

危なっかしそうに頂上にいる男　小島　蘭幸

頂上に立つことは、人間、実力のあるなしに拘らず不安なもので、如何に威厳を装うとも、見る人が見ると危なつかしく感じられるのだ。これは作者の見識から出た句であろう。

石垣のくずれたような脳となり　山川　阿茶

卓抜した比喩は申し分がない。老来ますます若やぐ作者にしてこの感慨があるのである

一笑にふしてはならぬ妻の夢　山内　静水

夫婦で川柳を楽しむ作者らしい愛妻ぶりが心を打つ。女と云うもの甚だ現実的ではあるが、何処か間の抜けた思考をする。そこで作者の愛情が湧いたのである。

染め替えて羽織は過去を喋らない　岩田　美代

強烈な思い出を持つ羽織を染めた。元の模様は消えてしまったが心の中に残るものには変りがない。物証が消えるとその分だけ心証は濃くなるのである。女心の沈んだ滓のような思いがよく理解出来る。作者の個性がよく出た作品である。

—水煙抄—

秀句鑑賞

——前月号から——

工藤甲吉

金だけの世にも思える淋しい日　岸本豊平次

金がすべてを支配する現実の厳しさはわからぬではないが、しかし、人間を救うものは決して金ではなく、人間の目ざめしかないという。それなのに一も金、二も金の今の世である。一万円紙幣と、五千円紙幣の聖徳太子も、あわれ今やあきれにあきれているのではないだろうか。とにかく、人間、金に心を蝕まれぬ心構えが最も肝心というところか。

裁かれに行く男にも天がある　定金　冬二

天はすべてのものの上にある。蒼天の下を裁かれに行く男。だが、この句の天はそんな軽々しい天ではなかろう。天泣・天助・天啓・天眷それに天界・天道などいろいろ考えてみたが、結局、善悪邪正に対する天の監視、即ち「天の目」ときめた。もちろん的の外れた私なりのこじつけで冒瀆はなはだしいところだろうが、いずれにしても私などには及ぶ事の出来ない句である。

うれしい日ひとこと多いことも言い　高橋　近江

誰しもがそうなり勝ち。まして女の場合などよく分る。それがほんとの嬉しさだ。

完敗の日から微笑み絶やさない　小谷　葉子

もしもそれが「完敗」でなかったら、その後はどうなったことだろう。とかく女は執念が深いといわれるから。面白い句。

うれしくてメガネが邪魔になる涙　鈴木かつ子

なにがそんなにうれしいのかは訊く必要がない。それはきっと母の、子に対する愛の涙だと思うからである。なお、この句、〝悲しくて〟では恐らく没になっていた?。

ふつつかと言うてはソツのない女　田中紀美代

現代にもこのような賢い女がいるのかと思った。〝不束者ですがどうぞよろしく〟は、昔なら誰しもが言う社交語の一つだったが。

ダイヤなど似合わぬ妻の健康美　渡辺　南奉

これがほんとうの健康美。そんな妻君をもつ句主は仕合わせである。十代に「なによりからだ」という健康標語で入賞したことを思い出したが、ダイヤなど似合う華奢な人は、どちらかというと、ほっそりして、弱々しくてダメ。

喪の家と知らずつばくろ巣を作り　宮尾みのり

このつばくろにはツミがないどころか、このつばくろは、この家の精霊を、また残されたこの家の人たちを、むしろ慰めてくれていると私には思われるのである。

大物に嵌める手錠は小さすぎ　三浦ひろ坊

児玉誉士夫のことを言ってるのだろうか、わが国のこれまでの〝相場〟をみてると、反対に小物に嵌める手錠が大きすぎるのが通例。それにしても世の中はロッキードの小型だらけである。もっとも賄賂は、昔、昔のその昔から我が国ではつづいて来ている。

善と悪その中ごろでゆれ動き　安田　紘

意思の弱さである。それがまた人間の弱点でもある。悪人を作るのは善人だというが、今は悪人を作らぬためにも決断が第一。

母と言うだけで子の顔知らぬまま　田中　虹汀

水上勉「雁の寺」?に出てくる和尚は捨子であった。その和尚が、こんどは自分と同じような境遇の子を次々貰い受け、養い、夫々立派な僧に育て上げた。捨子というとそれは昔からあったが、今の一部の母の所業とは事情が異っていたようだ。とにかくこの句の子を同小説の主人公「慈念」のような悲惨な目にはあわせたくない。

怪物の正体視たり二枚舌　筒井　朴竜

ロッキード事件に如実たり—か。

丸潼抄

川村好郎選

真心の届かぬ人の窓あかり
桜満開　離婚話少しのび
子無し妻　カーネーションが憎くなる
花吹雪花のしとねに死ぬもよし
逢えぬ日のきずなは細し菜種梅雨

八尾市　納　史葉

家中の時計　違っていて平和
温室で咲かせた愛を持ちつづけ
結末を秘めた空瓶抱いている
寂しさのあまり鏡へ笑ろてみる
多角経営の愛に溺れてゆく女

柏原市　小谷葉子

崩れ去る砂へ探りを入れる波
船が出て桟橋うつろな風ばかり
傷つけぬ為の無言を責めてくる
桃の木に桃咲く素晴らしい摂理
段々畠過疎に生き抜く顔を見せ

和歌山市　西山幸

追うて巡り追われて巡る木馬だな
蝶捕え放して帰るのも一善
肩書きが消えると肩が凝り出した
大いなる遺産に父の理想主義
大物は忘れねばならず呆けねばならず

豊中市　高橋古啓

溜まる不満で風船をふくらます
どん底のゆとり啄木の詩がある
恋終る心の砂ばくに日が落ちる
スモッグへ落ちる若葉の叫び聞く

寝屋川市　江口度

返り討ち株式欄が笑ってる
逢える日へひたひた海が満ちてくる
長針を進めてあすへ賭ける気か
歩行者天国つまり人間入れる檻

岡山市　時末一灯

御苦労さん云うてくれそう月仰ぐ

新宮市　西尾功

海女もぐる腰に生計の紐が伸び
感冒へ仁術くすりたんとくれ
調理法メモしておかずさんまだけ

西宮市　井上　のぼる

出不精の妻を誘った花便り
春の宵酒に理屈は言わぬこと
隙のない女でポケットに穴がある
金で済む話に変り酒となる

羽曳野市　麻野　幽玄

一粒の種が大樹となる門出
禁煙で太れば痩ろと医者の無理
学歴が次席止りの生辞引
赤ワイン若き二人の炎かも

西宮市　杉浦　婦美子

御馳走と同じ手土産出しそびれ
若返りの鬘に顔が妥協せず
セールスの時には啖呵も切りたい日
杉木立ここから神に近くなる

和歌山市　樫村　ふみよ

高層のビルに青空切り取られ
夕焼けになぐさめられた今日のミス
思い出は悪友だからなつかしく
置ゴタツ庭の椿に呼び出され

熊本市　有働　芳仙

気前よくだまされているバーの酒
故里は鬼も小鮒もいぬ団地
脱税の小口ばかりを追いまわし
年度末あちこち道路掘りかえし

東大阪市　崎山　美子

頼りない愛にも賭けてみたくなり
つきはなしじっと見守る愛もあり
今動く鼓動をしかとたしかめる
ヘルメット枕にしばし故郷の夢

大阪市　小谷　清女

こんな時母の強さをふと思う
口軽い男がたたく薄い胸
出来心おこしてならぬと錠かける
ふんばってみてもよろける老の坂

岡山市　井上　柳五郎

反対はつぶやく私語でだけおわり
無意無策薄気味悪い人にされ
ゴム紐の自由をかこつ妻の愚痴
準備したかくし芸だが指名来ず

今治市　蔦本　昌道

出際までアドバイスして妻の留守
世話をやく嫁が気兼ねな妻の留守
出かかった愚痴引込める妻の留守
三泊がこんなに長い妻の留守

今治市　原田　琲珈俚

することがこんなにもある生きている

闘病の長さ足音聞き分ける
欺す気のない瞳だったとまだ思い
よく見える眼も閉じている女

松江市　梅本登美也

倒産の館の奥でピアノ鳴る
制服をぬぐと巡査はよく笑い
飴玉をしゃぶって見入るラブシーン

岸和田市　池田露子

何のことか自分で書いた筈のメモ
火の車押して明るい主婦の顔
独り住む窓を噂が通り過ぎ

和歌山市　桑原道夫

ポスターの女に慰められている
嘲るように時限爆弾秒刻む
恋せよと春のポストが立っている

尼崎市　大垣たもつ

ピーナッツ羨む善し悪し別にして
同権はバターの切れた朝に慣れ
食堂の茶碗の欠けも佗しい日

姫路市　大原葉香

競うビルそれでも天はまだ高し
銃口を避けて巧みな処世術
昇竜の意気うすれゆき早や四月

竹原市　鈴木かつ子

傷心の耳にささやく雨の音
雨乞いへ空は無情に夕やける
おしゃべりの孫がおしっこまだ言えず

八戸市　安田紘

合格の喜び盃から溢れ
通知表孫の言い分聞いてやり
愛称で呼べないほどに偉くなり

弘前市　小山内貞男

家計簿をかきまわしている義理の二字
舌足らず誤解生れるもとになり
エンジンがかかり放しのハシゴ酒

須賀川市　平栗金太郎

包帯の白に無謀を叱られる
大げさな包帯傷が笑ってる
奥様にぴったりですと買わせる気

富田林市　中村優

身寄りなきベッドは造花に気を休め
トレモロの波調が届くおぼろ月
ローソクの易に甘える春の宵

八尾市　田中紀美代

他人事だから正論押し通し
豪快に笑う淋しい人がいる
新任の保母泣きたいらしい顔

今治市　渡辺南奉

心まで冷える四月に寒波来る
子の為が子に重荷かも反抗期

青写真拡げたのしい子の寝息

東予市　小山悠泉

税務署の目はやりくりと見てくれず
ジョニー黒の勢い借りたプロポーズ
喰べ盛りが弁当残して来た不安

羽島市　伊藤静枝

里帰り庭の草木もやさしくて
ふる里の野山無性に馳せ回り
かわらないままのふる里よろこばせ

寝屋川市　柴田恵美子

花くぐる声は乙女になっている
柳葉魚筒一ぱいに子を詰めて
子の役も受け持つ夫早寝です

唐津市　桧垣岩光

有料駐車外車の横に小さく置く
思い出になるさ失恋なぐさめる
二つ三つ若がえりする万歩計

大和高田市　岸本豊平次

金だけの世とも思える淋しい日
山深く住めば海鳴り恋しがり
踏まれてもふまれても麦天に向き

豊中市　安藤寿美子

小ぎれいな女水虫薬買う
洗濯機ガタゴト私の朝の歌
洗い髪すくよう柳に朝の風

貧しさに居て兄弟の連帯感
転んでも唯では起きぬ親ゆずり
お互いに思わせぶりのまま別れ

青森県　荒田つる

合格は合格同士肩を組み
人生のむなしさ無縁坂登る
前進へ妻の笑顔が送り出す

大阪市　那須鎮彦

騙されてみましょう貴方の嘘になら
入院料上れば病気快くなりますか
仁術の言葉は古し医者もスト

豊中市　出口セツ子

いたずらを叱ったあとの淡い悔
この辺で折れてやる気の語を探し
その通り然し女房に謝まれず

尼崎市　中谷利美

次次と上がる物価に愚痴が切れ
理想には遠い日日なり日誌書く
知らなくてよい情報にまどわされ

美唄市　青木仙人

毒舌を聞いても和む友があり
健康な朝は味噌汁よい匂い
寝てほしい方の赤ちゃん先に起き

岡山県　池田半仙

石炭が電気になってスト時代
ご協力願って線路歩かせる
高官という字のイメージ黒ずめり
吹田市　藤原　世史春

通院の桜並木は巡る春
通院に老深し妻とステッキと
島根県　安達　潮音

ちらしみな句作りにする暝すべし
数え唄すたれて子供乾きゆき
今治市　園部　正則

風診の子を閉じこめる春霞
寄りかかる女　車中の夢は何
尼崎市　中塚　喜甲

お小遣値上げをせまる春休み
目が覚めて指動かしてみるひとり
今治市　大本　バット

百姓に貧乏人が無い時勢
審議拒否しても歳費はふんだくり
今治市　伊藤　一郎

里の親不憫に思う事ばかり
入学祝いで物入りの春
今治市　真山　国彦

花嫁が美人で生きる貸衣裳
蜜蜂よさあ春が来た稼ごうぞ
今治市　今井　松花

ブランコの子をチラと見て編む毛糸
今治市　古野　伶人

儲からぬ菜種畑が減る世相
岸和田市　池田　香珠夫

お互いに便利だからと同棲し
籠の鳥天を仰いで水を飲む
鳥取県　加藤　茶人

逢えば金逢ねば恋の軋み聞く
相席を頼む女性が可愛すぎ
島根県　松本　文子

渡り鳥私も北へ帰りたい
くりかえす暮しに追いかけられて生き
新見市　吉田　落猿

春らんまんこんな佳い日の誕生日
菜種梅雨静かに聞いてする写経
鳥取市　有田　鹿の子

握手した手の温もりが騒ぎだし
春雨がしとしと屋根打つしまい風呂
大洲市　宮尾　みのり

食べてもたべても満腹感のない世相
正しくてまじめな人へ出るアクビ
新潟県　高野　不二

預金利子どう下ろうといい暮し
葬儀社も競争がある世智辛さ
唐津市　田中　紫浪

見破っているから君の眼が笑い
土産屋の元祖老舗の多すぎて
唐津市　岩崎　實

二次会の流れに乗らず花の道
いささかの不純もありて人を恋い
唐津市　山下勝一

ハネムーン隣りの嫁と竝べてる
吹けば飛ぶような将棋の王があり
唐津市　田口虹汀

五十年晴れ間晴れ間を縫うて生き
美しい怖いやさしい富士を観る
滋賀県　柚木踏草

届かない射程で笑ういくじなし
適当に甘えて女の長い風呂
新潟県　市川一峯

あやす顔あやされる顔に嘘はない
あるだけは飲めと云うのに切り上げず
島根県　岩田三和

ありがとうそんな言葉のない労使
仏前にそなえる花に流派なく
竹原市　大島花炎

ご先祖となごむ茶の間へ彼岸餅
気のはやいボンボリへ桜のまばら咲き
三重県　熊野溪水

自黒をつけたがるのが居て困り
塾・塾・塾そして学校で遊んでる
松江市　黒目大鳥

村々に子連れ行商親しまれ
馬耳東風蝶のごとくに舞うてみん
橋本市　森脇善彦

道しるべ道なき道に埋もれてる
ねぎらいの言葉で私馬鹿になる
兵庫県　高橋近江

降れよ雨妻が持たせた傘がある
生業に疑惑は持たずサロンパス
尾鷲市　渡辺伊津志

楽しさのある嘘だから聞いてあげ
疲れているのか気に入らぬことが増え
大阪市　平井露芳

十円玉拾い千円札落し
自動巻腕離れたら弱り出し
羽咋市　三宅ろ亭

六十の坂漂白効かぬシミ
出る杭を叩いている方の手がしびれ
広島県　原田篤史

平家部落雨に煙って山深し

転勤の季節ホームの泣き笑い
大阪市　鬼柳夏彦

末っ児の初運転は母が乗り
断われぬ拍手へ老いの腰がのび
大阪市　堀口欣一

散歩道けさは不幸のあつた家
人間の顔を見ていて面白し
八尾市　土井鹿蔵

病状の進み畳のひと目ほど
逃げ遅れ焼け死ぬ記事をしかと読む
堺市　栗本藤持

老いらくの恋静かなる若返り
死ぬこともならぬこの世の物価高
松江市　豊田巡歩

係長の首をギャンブルちょん切った
おちぶれて心冷たい金を借る
岡山県　長尾保

美しい言葉で朝から酷使する
補聴器のせいにしておく聞き違い
松江市　岡崎雪美

禁魚区の鴨ゆうゆうと波に乗り
ふきのとう春の苦味をかみしめる
宝塚市　吉田笑女

留守番へうぐいす一声鳴きに来る
予定日は過ぎて桜の花見頃
山口県　高崎雀声

子をつれて金もってこいアドバルーン
参観日親確かめてから手をあげる
泉佐野市　大工静子

まだ女盛りですよと六〇の春
あえぎつつ詣る霊場の有難し
備前市　武内雅堂

社長いま娘婿だけ頼りなり
政策のないまま故郷過疎地帯
大阪市　欄蘭

くらげまで汚染の海に寄りつかず
父母恋し思う日もあり療住居
七尾市　松高秀峰

合格の新聞三部買い戻り
栄転が決り一杯飲む話
大阪市　白石潔

位階勲等もつてゆくらし大墓石
三浪の壁が志望を変えさせる
大阪市　田中了介

天網は意外に疎なりロッキード
内ゲバもいる食卓の子沢山

生活を針で支えた母の腕　尼崎市　駒村岳麓

宴会の予算気になる舞台裏　出雲市　高見鐘堂

まぼろしの君を愛する月が浮き　高知市　竹崎寛

桃が咲く娘のいないわが庭に　倉敷市　高山みどり

花の山掏摸も一会の人なるや　唐津市　岩下照沖

心鏡をまだ磨いても磨いても　唐津市　三浦ひろ坊

捨切れぬ故郷さびしく祖母が居る　高槻市　山田スミ子

うぬぼれが又々むつくり顔もたげ　鳥取市　勝山紫宏

鯛焼きの景気が欲しい自民党　河内長野市　井上喜酔

花に酔いしばらく妻を他人にす　津山市　木下水保

掘り立てのたけのこらしい山の土　大阪市　松本甫久路

鳥取市　岸本無人

回診の先触れ患者のコンパクト　橿原市　西本保夫

ハイミスを気楽と思う日もあって　寝屋川市　福富隆子

洗濯機今朝は愚痴言う音に聞き　堺市　堀畑日々子

お茶室へ庭の椿も景を添え　島根県　飯塚虎秋

戸籍には一人八人の子を育て　橋本市　岩倉天彦

七転びこれしきのこと奥歯かむ　大阪市　新川貞裕

あの時に選った帯して今日を逢う　西宮市　朝山千世子

川柳の芽育てて余生若がえり　羽曳野市　岩橋双虎

北陸路鈍行できた蕎麦の味　八戸市　島田昭治

妻のスト国鉄よりも身にこたえ　出雲市　藤井晴月

さんげする心に明日が笑いかけ　岡山市　船越不二男

満開の桜職場にも慣れて

百人一首と川柳 (24)

富士野鞍馬

七一　大納言経信

ゆふされば門田の稲葉おとづれて
　芦のまろ屋にあきかぜぞふく

この歌は「金葉集」秋の部に
「師賢の朝臣の梅津の山里に、人々まかりて、田家秋風といへることを詠める」
と詞書してのせられてある。

経信は、権中納言源道方の子である。長元元年（一〇二八）に従五位下三河守に任官してから、永保年中には正三位大納言にすすみ、大宰権帥となり、承徳元年（一〇九七）八十二才で大宰府でなくなった。「源都督」また「桂大納言」の別称があった。

川柳は「芦のまろ屋」をとって

一本妻は芦のまろやに肌寒し　（宝八松）

七二　祐子（ゆうし）内親王家紀伊

おとにきくたか師の浜のあだ波は
　かけじや袖の濡れもこそすれ
（金葉集）

紀伊は、平経方の娘で、兄の重経が紀伊守であったのでこう呼ばれたのである。後朱雀の皇女祐子内親王に仕えていたので「一宮紀伊」とも呼ばれていた。

「たか師の浜」は堺と岸和田との中間にある高石町の海岸である。この歌は堀河天皇の時に行われた艶書合に詠んだのである。

七三　権中納言匡房

たか砂の尾上のさくら咲きにけり
　外山のかすみ立たずもあらなむ
（後拾遺集）

大江匡房は、信濃守大江成衡の子で、寛治八年（一〇九四）権中納言となり、永長二年（一一一一）大蔵卿となり、同年七十一才でなくなった。幼時から神童と呼ばれ、漢学を学んで、その博学を知られ、源義家がこの人に兵法を学んだ話は有名である。

川柳は右の歌に対し

百人首でも高砂を通りぬけ　風松（一〇四2）

――もう一人は謡曲高砂の友成

七四　源俊頼朝臣

うかりける人をはつ瀬の山おろし
　はげしかれとは祈らぬものを
（千載集）

源俊頼は、大納言経信（七一）の三男で、堀川、鳥羽、崇徳の三帝に仕えたが、のち父の引退していた近江の田上に閑居した。

大治二年（一一二七）に、白河法皇の院宣をうけて「金葉集」を選した。そして大治四年（一一二九）になくなった。

川柳は、俊頼を年寄に洒落て

としより朝臣は哥迄おとなしい　狐声（筥四10）

業平にとしより朝臣いけんする　（三二21）

川柳塔柳箋　一冊　百円　送料　二百円

また文句取りに

うかりける人とはげしく姑取り　雀芝（傍四31）

七五　藤原基俊

ちぎり置きしさせもが露を命にて
あはれことしの秋もいぬめり

この歌は「千載集」に「僧都光覚（基俊の子）維摩会の講師の請を申しけるを、度々洩れてければ、法性寺入道前の太政大臣に恨み申しけるを、しめぢが原と侍りけれど、又その年も漏れにければ、遣はしける」と詞書してのせられてある。

藤原基俊は、右大臣俊家の子で、名門の出ではあったが、官位は低く、従五位下左衛門佐で終わっている。保延四年（一一三八）に出家して覚舜といった。康治元年（一一四二）になくなった。前にある俊頼と同じ時代の歌人であった。

「させも」はさせも草であるが、それを取って川柳は、

させもが露を命だと下女もさせ　雨声（五九5）

七六　法性寺入道前関白太政大臣

わたの原漕ぎ出でて見れば久方の
くもゐにまがふ沖つしらなみ

この歌は『新院、位におはしましし時『海上遠望』といふことを詠ませ給ひけるに詠める」として「詞花集」にある。「新院」は崇徳上皇のことである。

この表名が、百人中一番長いので、それに興味をもち、おもしろく川柳に詠まれている。

いせはみちかく法性寺長すぎる　（安九宮1）
なま長い名は百人に一人なり　春風（七六7）
戒名はまアどうだろう法性寺　如雪（一二八32）
法性寺そとわのやうなるふを立　（明三宮3）
門札を手間とる前の法性寺　美調（一二三7）
長い御名文の入道武の長者　稲丸（一六一1）
――源氏の長者
法性寺吃りが呼んで小半日　都々一坊（一五二20）
鸚鵡当惑早言の法性寺　ごまめ（一三八31）
コイツ大変法性寺眼を廻し　竹賀（一四〇11）
一息ついて和田の原嫁はよみ　晴山（二九9）

また、歌の文句を取って

雲井にまがふ白波ははかま也　不酔（二八21）

と袴垂保輔の事を詠んでいる。

法性寺入道前関白太政大臣とは、藤原忠通のことである。父は知足院関白忠実で、嘉承二年（一一〇七）十一才で元服し、正五位下に叙せられてから、累進して保安二年（一一二一）には、二十五才で関白となった。崇徳帝が即位されると摂政となり、大治三年（一一二八）には太政大臣になった。次の近衛帝の時も摂政をつとめ、応保二年（一一六二）六十六才で出家し、法性寺に入って円観と称した。長寛二年（一一六四）六十八才でなくなったのである。保元の乱の崇徳方の首領藤原頼長は、この人の弟である。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社　西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

愛染帖

正本水客選

桜ちらほら女の長い喪が明ける　八尾市　高橋　夕花
春の宵　造花にオーデコロンなど
げんげ咲く　淡路廃帝陵真昼　大阪市　川口　弘生
火葬場に枝垂れ桜がよく似合う
父と対話の刻をつくった春の雨　大阪市　小出　智子
失いしときより愛は彩を培す
十字架を見つめるマリヤの瞳を見たか　八尾市　大路　美幸
極楽に手帳とペンはないだろう
釈迦の手の中で争う愚かしさ　尼崎市　黒川　紫香
目の前に手の届かないひとがいる
似たとこをつついてみてる子の寝顔　青森市　工藤　甲吉
何見つけたか一人は渓へ辷り降り
恐ろしいお人だ困った時笑う　東大阪市　竹中　綾女
ムード派を口三味線に乗せてくる　岸和田市　池田香珠夫

故里の茶がゆの碗をなつかしみ　倉敷市　小幡　里風
葉桜や心残りの道を行く　大阪市　西森　花村
退屈も多忙も捨てに青葉道
正眼へ呼気整える隙は待ち　和歌山市　野村太茂津
バケツ一杯　養鶏場の割れ卵
山桜　ゲージに卵落ちる音　岡山市　船越不二男
年老いてまだ心に借り残る
持ちつもたれつ夫婦で穢土渡る　大阪市　西川　誓二
マンガ読む青年　海を見ずに着く　香川県　三井　酔夢
故里は桜色に塗りたい画布となる　島根県　錦織　文子
単細胞なりに悪女になる時も　大阪市　河野　君子
身についた癖で老いゆく恐しさ　島根県　堀江　芳子
老夫婦おんなじとこが痛くなり　生駒市　草深　酔升
あの世へも芽を出せ花の種をまく　島根県　西村　早苗
青い鳥逃げる翼も持っている　豊中市　高橋　古啓
春の風使わぬ部屋の窓も開け　東大阪市　竹中　肖二
自動ドア呪文唱えて踏む子ども　岸和田市　池田香珠夫

雨あがり　わざと桜の露にぬれ　東大阪市　竹中　綾女
忙しさ振り切るように顔を剃り　鳥取市　勝山　紫宏
男とは女とはとて割りきるや　鳥取市　河村　日満
歯切れいい言葉通りでない生活　貝塚市　野坂つき子
日々平和　悲しいことを考える　今治市　月原　宵明
前科ありそうに住込むパチンコ屋　東京都　山根　白星
ハンガーへ今日のつかれが吊るされる　西宮市　藤村　〆女
老いの坂もう頂上が見えて来た　西宮市　朝山千世子
女として割りたい水甕かも知れず　竹原市　三宅　不朽
菜の花の淡路へ帰る人形師　今治市　今井　松花
今朝の雨　土の中まで春告げに　唐津市　岩下　照沖
花の私語聞こえて来そう春の雨　東予市　小山　悠泉
かげろうにあけぼの色の花ゆらぐ　藤井寺市　西　いわを
さっぱりとしたとは云わず喪服脱ぐ　松江市　梅本登美也
知床の便り馬橇と流氷と　高槻市　若柳　潮花
あの人も盗人だった貸せば来ず

新宮市　大矢　十郎
飼い犬へ野良犬尻っ尾を振って春

松江市　舟木与根一
休日毎の散歩　有難い京の四季

京都市　松川　杜的
こわれかけた愛へ歯車買うて来る

八尾市　宮西　弥生
タンポポの良さは何処にも売っていず

今治市　古野　伶人
満開の日　花は命を限られる

和歌山市　若宮　武雄
倖せがこぼれそう掌を握りしめ

大阪市　神夏磯道子
父の涙は誰にも気付かれまいとする

岡山県　出原　敬一
美しい棘だ爪先たてて抜く

岡山県　武内　雅堂
言葉選り公約数にはめて云う

岡山県　池田　半仙
表面張力こわれたあとのむつかしさ

今治市　原田琲珈俚
お茶すこし倖せすこし　まるく座し

島根県　堀江　正朗
貧乏を覚悟　真すぐ歩かない

和歌山市　津田　与史
風くれば矢車廻る外はなく

今治市　園部　正則
アラジンのランプにまさるコンセント

島根県　小砂　白汀
格式の好きな女に髭がある

滋賀県　柚木　踏草
困らせてあくまで自己を主張する

小松市　馬場　魚山
散り初めて春のゆくえをたしかめる

大阪市　西出　一栄
灰色の湖嘘いっぱいにみたされる

島根県　榊原　秀子
病院のベッドの鏡で花見する

出雲市　高見　鐘堂
二階窓　変哲もなく町暮れる

和歌山市　桑原　道夫
風邪引が桜の花へもうつりそう

大阪市　松本甫久路
洋蘭の花のつくりのただならず

唐津市　岩崎　實
葬式の事も電話で片付ける

今治市　真山　国彦
時代感ズレて相手にされぬボス

羽咋市　三宅　ろ亭
石遠く投げても激流答えない

和歌山市　西山　幸
思惑がからみ合ってる不協和音

八戸市　小泉　紫峰
腫れ物にさわる思いで娘を諭し

松江市　豊田　巡歩
幸せを通して袖に折目あり

倉敷市　水粉　千翁
戸締はよいか満期の金がある

堺市　高橋千万子
この島に故里に似た匂いかぐ

大阪市　宮尾あいき
楽しみに行くおでんやの酒の味

唐津市　新岡回天子
よく喋る鸚鵡に今朝は腹が立ち

唐津市　田中　紫浪
空真赤　天地一つに黄昏れる

倉敷市　能登原白水
長靴を脱いでやさしい母になる

岡山県　長尾　保
馬鈴薯の花の如きか父の日は

今治市　原田　一風
巡り来る友の忌応える何もなし

大阪市　江城　修史
年輪の重みか清濁併せのむ

大田市　藤田軒太楼
大粒のいちご隣は新家庭

津市　桧垣　岩光
心の窓　磨いても磨いても

唐津市　三浦　広坊
カトレアの香りに筆を久々に

倉敷市　高山みどり
針金でしばられ盆栽新芽ふく

高槻市　山田　季賛
人に説く口養生のむつかしさ

和歌山市　内芝としよ
目をつむりや早逝の友が話しかけ

八戸市　島田　昭治

投句先きは
〒546　大阪市東住吉区湯里町1の25
（電話大阪・703・3046番）
正本水客宛
締切毎月十五日―（一人三句以内）

心にしみる人間寄席

―不二田一三夫著「川柳寄席」を推す―

東野大八

本誌名編集の不二田一三夫の本が出た。題して「川柳寄席」なかなかうがったタイトルである。もっとも私にいわせれば、この本は川柳を透して眺めた、痛烈な〝人間寄席〟でもあると申したい。

―喪服まで借りてきたのにもち直し
―死亡届け　ガム嚙みながら受理される
―骨揚げが調理師だった箸さばき

厳粛な死であるはずの人間の末路をおしつつむその皮肉におかしみのこもるペーソス、まったく人間そのものの死にざまで寄席的である。

この著者の生活環境は、映画や高座の芸能人の世界に密着してきた。したがってずばりそのものの寄席の人間性も浮彫りにされる。

―楽屋にもランクがあった畳かず
―人気とは「めくり」見てさえもう笑い
―笑ってるのは高座の二人だけ
―前座或る日　楽屋の隅で泣いていた

寄席芸人の哀歓をこれほど適確に捉え切るには、高座の垢にまみれなければならない。その意味からすれば、この不二田一三夫は、高座の原点に立つ漫才脚本家であることが大いにプラスしていることになる。

一口に漫才作家といっても、尋常一様のものではない。複雑怪奇な当節のブラックユーモアの感触の中で、ラチもないくすぐりや駄洒落で人を笑わす、一見愚にもつかないことのようだが、その手段はともあれ、とにかく他人をアッハッハと笑わせるにはどのようなテクニックと笑いの要素を引き出さねばならないか。この人間の笑いの本能発掘に漫才作家たちは、実のところのたうち回っているのである。人間渡世の軟派の極、それがそうした作家グループの世界なのである。不二田一三夫もその一人である。本書に盛られた四本の漫才脚本や、その他の軽快な雑文の奥からもこの不二田という作家の才能が、痛ましいばかりの貌つきでさしのぞいている。

日刊新聞の編集デスクで、三十余年もの鉄火場に身をさらしてきた筆者は、活字マスコミの近代的感触は、いま言った軟派の極に徹すること―この信条で生きてきた。

××的であるが故に、即ちこうあらねばならぬ式の硬派の文法は、もはや当節ではこの世のものではないのである。文語調の難解な論文調というものは、実のところ一番書きやすいものなのである。口語による平易な語り口で、哲学を説き、宗教を語り、経済の本質を衝くモノ書きになることほど至難な技はない。軟派をこなさねばこれからの世に生きる一人前の記者ではない―そう先輩から教導され厳しくシゴキ抜かれて、どうやらその軌条にそった私は、そのまま同僚をはじめ後輩たちにこの信条一辺倒で対決してきたものだ。いうなれば浅学非才を是認する人間にとってはからめての方から奥儀に達せねばめしが食えない―そのような実践主義ともいえばいえる。ふりかえってみればそれも「真」であったと私自身も納得している。

不二田一三夫はそうした私と同じ道を歩いてきた一人であろう。

―寒がりのくせに孤独は壁の隅

―人生の傾斜へころげまいとする
尻も凍りそうな孤独に生きた男のこころがそんな素顔をつい覗かせる。この孤独さ故にもつ赤筆にも虚無が籠もるのである。
―作家の妻　いつも背中へ話しかけ
―誤植だらけのような人と添い
―スランプの壁をにらんだままに老け
―名人に人並以下のともあり
おそらくこれらの句は体験句であろう。
不二田一三夫は、私同様かなり常識はずれのところがある。長くなるのでその実例を省略するが、とにかく人並な人間からみれば、随処に隙間風が通りぬけ、あるべきところにネジクジが欠けている。逆説的に申せばこんな使い古しのモチ網みたいな処生ぶりだからその人生が持ちこたえたのかもしれぬ。そう本人自身も割り切ってしまえば、そこはうまくしたもので独自の世界も開けてくる。秋田実先生がこの本のトビラで実に名言を吐いてござる。
「蠟燭は自身を燃やして他を照らす」
「才能とは長い忍耐のいいである」
これは不二田一三夫だけの専売特許ではない、私自身もそのお裾分けにあやかりたい言葉である。
川柳界にはA級文芸詩の「群像」や、「文芸」なみの文学作家がいる。「文芸春秋」や「小説新潮」式作家風もござる。これに対し不二田一三夫は「オール読物」的作家である。川柳を純文学的手法で高度化す意欲も結構だが、通俗的な大衆文学で筋を通していく作家も必要だ。この「川柳寄席」はいわばその〝俗の真底〟に迫ったものと私は推賞をおしまない。とにかく川柳句集といえば、なんでもかんでも自作とみればてんこ盛りにしたがる発刊者の中で、他人の鑑賞に堪えたものだけを並べるというこの本の作者は、まことに賢い人だと感心したことも最後につけ加えておこう。
「川柳寄席」校了やっと墓が出来　一三夫
（A5判装幀美本・漫才作家くらぶ刊・価二、〇〇〇）

女シリーズ（その4）

菊沢小松園

月三更泣いてわかれた人の妻
それからは泣いて他人になりました
けものみち帰りは処女でない蹴出し
女もう実のなる木だけを愛す齢
ええとこの人とは見えず口答え
腰ひもの数だけ女　苦労する
もめている恋とは知らず水すまし
約束はなかったことにして眠る
兄嫁にある夜おんなの眼をみつけ
殺された女を拝む破目になり
拗ねてても女勘定間違えず
琴の爪恋かき鳴らす手と見えず
離婚成立礼を言わねばならぬ
倖なことに女は字が読めず
風のいたずらスカートだけに吹いてくる
月おぼろ妻ある人の手と感じ
中年の恋やんわりと抱きすくめ
企んでおいて先におんな寝る
切ッ先きの角度流し目で見届ける

壱岐光武弦太朗

証人台のカバーたっぷり汗を吸い
狸寝もピーナツ腹の大だぬき
換問に政府ハラハラ及び腰
首ひやりピーナツ高官エックス氏
怨み哭く遺族もあるに爆弾魔

「川柳塔の歌」

審査の経過発表

選考委員が再三再四会合し、なんとか入選歌を選びたいと思ったが、これは永久にうたわれる歌詞だけに厳選にならざるを得なかった。難点は「川柳塔」の魂がうたわれていないこと、または「川柳塔の歌」ではなく「川柳の歌」であることなどが挙げられた。

79篇の中から左の13氏の方々に謝礼として千円宛送り、そのご苦労に報いることにしました。川柳関係以外の方々には発表誌を送り深甚なる謝意といたします。

なお再募集の場合は、より力作をお寄せくださるようお願い申しあげます。

川柳塔社

中村ゆきを　神戸市灘区楠丘町4—3—22・六甲ビューハイツC一〇一
花田　鶴彦　福岡市外古賀局庄東
大路　美幸　八尾市高安町北一—二五
井丸　糺　北九州市八幡西区折尾3—9—24
吉田　水車　名古屋市千種区観月町1—2
弘津　柳慶　柳井市瀬戸側458—7
槙田　英詩　呉市天応町本町国鉄宿舎
本田　秀雄　大津市田辺町12—38
宮武　初　丸亀市山北町442—7
細川雄太郎　滋賀県蒲生郡日野町大窪118
児島与呂志　藤井寺市北条町4—38
天正　千梢　大阪市浪速区日本橋筋5—4—1
欄　蘭　大阪市西成区津守2—3—20

川柳塔社常任理事会（5月4日）

多久志氏から四月の会計報告。生々楽天刊行記念パーティの反省。と進み、橘高薫風氏から〝川柳塔の歌〟の審査報告があって、結果的には該当作なしということになった。最大の理由として、川柳の宣伝であって、川柳塔の魂がはいっていないと云うことである。賞金総額一万三千円は謝礼として上位13氏に送ることになった。（別掲参照）

本年の二賞発表句会と同人総会は10月3日（日）ときまる。そして常任理事会は10月1日。

今夏の篠山のデカンショ踊には本社が主催することになった。篠山の小西無鬼氏と八尾の西尾栞氏の協議により兼題などが決められ次号発表のはこびとなる。

六月本社句会は「川柳寄席・出版記念祝賀句会」となる。

出席—古方・柳志・静馬・栞・多久志・形水・薫風・牧人・小松園・好郎・一三夫（敬称略）

枝豆の頃

吉田　水車

毎年枝豆の頃になると畏友豆秋のことがおもい出される。柳号豆秋の由来は、大阪道頓堀のおでん屋万よし（戎橋南詰西、松竹座のあたりではなかったかとおもう）でおつまみの枝豆を相手にビールを飲んでいた時思いついて付けた、と本人が言っていた。そのおでん屋「万よし」のあるじが川柳雑誌の同人で庄さんと言い万よしと号した、そしてご本人は今で言う革新派の闘士で大阪市会にも当選された。そんなことで「万よし」は川雑同人連やその他の柳人の溜り場になっていた、それほどの年でもないのに万よし老と呼ばれて人気があり、折にふれて一緒になって飲み出すとみるみるうちに酒タンポの山が出来、勘定の方は何が何やら訳が判らなくなり、各自大体の見当でお金を払らって帰ったが、万よし持ちの方がむろん多かったのに違いない。そんな場でも豆秋は隅の方で眼鏡の奥からニヤニヤするばかり、それでも時々一流の警句を吐いて笑らわせていたものだ。以上は昭和一桁の頃の酒のように、ともかく、まったりとしたよき時代であった。

川柳の一茶といわれた豆秋の句趣は淡々として、人間豆秋は陶冶の境地に近づきつつあったのである。

枝豆も茄りかげんぞ豆秋忌　水車

堀内暁風氏逝く

米沢暁明

南無三宝手足動かぬもどかしさ
斗病の今日一日がやっと暮れ

暁風さんは昨秋入院され、年末には退院、小康を得られるやに見えたのに再度ご入院、ついに三月一日の未明脳硬塞で他界された。

お生れは、愛媛県長浜町（明治三三）拓植大学卒業後結婚、昭和四年大洲市に移り住まれ終始運送業――のち日通大洲営業所長として敏腕をふるわれた。その間、三十九才で町会議員、戦時中は大政翼賛壮年団長、寺総代は最後までの諸要職にもついて活躍した。

昭和六年、今は亡き今川椋影と、「ひじ柳壇」を創られ、水郷川柳社の草分けとして以後「川雑」から川柳塔一途に生き抜かれた。

東野大八著「人間横丁」に紹介されているが、麻生路郎師愛媛入りと言う時　前田伍健が大洲へ案内されたのは、後で聞いた話だが当時大洲なら受入れが出来ると判断されたのであろうということだ、ここにあなたらが中心となって大洲柳界をがっちりまとめられた川柳愛のあらわれであろうと思われる。

続いて川上三太郎の来洲、蛭子省二は内子町（大洲から一二㎞）に居を構えられるなどその時々に想い出の一夜、たのしい句会など面目をほどこしたのも一に暁風さんあなたらの功績といっていいでしょう。

平素は、もの静かな人柄で、川柳について見識をもたれ、訥々と語り出される柳論は耳を傾けるものがあり、われわれ後輩のよき指導者でもある。

酒は好きであった。静かに飲むべかりけりで初まるが、盃を重ねるに従い元気が出て時に武勇伝もあるにはあったがそれは昔のこと「野崎まいり」の踊りが出る頃は最も機嫌のよい時と言えたでしょう。

職をひかれては、ガリ版に興味をもたれ、水郷月報はもとより、「酒百題」「懐古と暁風」など小冊子にまとめておられる。後者は水郷の歴史が伺えるもので貴重な資料となるものだ。

また近くは日本画にも腕をあげ、能書の句と画の色紙は枯淡の境に入り素晴しい数々を残して、生前を偲ぶに十分である。

とまれ、暁風さんはもうこの世にはいない今はもうただ冥福を祈るのみ。

徳光院信誉暁風居士

四月十八日中陰満ちて菩提寺寿永寺に納骨された。少々作品にふれて筆をおくことにする。

辞世　**この世ではもう用ずみで立つ浄土**

暁風抄

足音へそっと外した膝枕
思い出は明治の頃の淡い恋
かえらぬときめた故郷へ無一文
看護婦の代りの妻へ無理をいい
どたん場で思案の外の知恵がわき

（辞世は納棺の折り、色紙など探している時私が見つけたものです。）

★

大洲の米沢暁明氏から―暁風氏逝去―の悲報に接した。

愛媛柳人には愚妻が愛媛の出身なので、いつか参上しますと話しかけ、同人になっていただいた方が多い。その中に堀内暁風さんもいた。暁風さんは「同人になってもよいが、戦後まもなく東野大八氏から〝川雑〟にと誘われたままなので」ということだった。そこで49年6月に大八氏と私とで同人に推薦したことだが、なかなか義理固い方とお見受けした。―ついにお会い出来ずじまいになった。

I・F

降　参

江城修史選

降参をした上　孫の馬になり　登美也
降参へ和解の酒が運ばれる　甫久路
降参と見せかけ野望暖める　軒太楼
降参と笑ってかわす年の功　一風
降参をして集金はして帰り　国彦
子供皆ママの味方で降参し　一郎
降参をされた方が嬉しそう　バット
もう降参などとキリなく飲んでいる　香珠夫
降参はしても目玉が光ってる　本陰棒
手枷足かせ降参したい日々　思月
降参しとこう商売上の笑み　天彦
終戦と云う降参の負けおしみ　どんたく
一発で降参もなき未来戦　藤持
悪者が降参　大団円となり　洛酔
降参と泣いても言わぬ子に育ち　木魚
降参はせんぞ僕には夢がある　与史
降参のひと言　言えぬ日の焦り　与史
先きさきのすべてを読まれさじ投げる　仙人
降参のあとに女の黙秘権　優
人前でねだる子供に降参し　近江
降参をした顔でない飲みっぷり　カズエ
白旗をあげた日　日本晴れていた　カズエ
降参をしとこう晩酌前だから　隆子
あっさりと降参好意を持っている　保夫
のこのこと使い果して降参し　保夫
インフレへ降参をした貯金帳　悠泉
奥の手は見せず降参して戻り　代仕男
ベスト尽して降参に悔がない　重人
負け犬に今日は夕日が赤すぎる　重人
降参はしても始末はしてくれず　弘朗
姑が降参よっぽどの事あったらし　漫柳
降参させ軍鶏の声高く　いわを
降参をしてから握手はなさない　いわを
降参へ貧乏神もついて来る　富子
降参をして満足な母の顔　克枝
降参と言うたは恋のテクニック　与根一
天皇は降参したとおっしゃらず　肖二
降参をすれば気楽と知りながら　暁明
降参をさすまで女差しで飲み　潮花
降参をさすには野次が多すぎる　佳
降参の碁石は派手にかきまわし　道子
降参をさせる苦労を聞かされる　カズエ
降参の瞬間　男を捨てた顔　季賛
降参など言えず口笛吹いている　与根一
降参をするラッパならもう吹かぬ　人　福水
降参のあとはやさしい父となり　地　豊生
降参の敵のメンツをたててやる　天　度
軸

晴れ間

西垣錦風選

お月様雲の晴れ間からこんばんわ　春日
花曇り晴れ間に差した陽の恵み　貞祐
まる見えの罠に晴れ間のない政治　弘朗
招かざる客へ晴れ間とせきたてる　富子
さわやかな晴れ間へ池の鯉が跳ね　肖二
晴れ間指す太陽に土の香り立ち　洛酔
あきらめた心の晴れ間へ乾す泪　里風
目で晴れ間感じとるのも夫婦です　近江
白い杖しばし仰げる晴れ間なり　木魚
かたつむり晴れ間途中の一と休み　無人
お袋の財布しぶしぶの晴れ間あり　漫柳
洗濯が乾く晴れ間へ妻の歌　南奉
晴れ間見え満艦飾の窓窓窓　照沖
蝶ひらり梅雨の晴れ間の密を吸い　登美也
生け垣の晴れ間へ急ぐ蜘蛛の糸　代仕男
傘をさし傘をたたんで二人連れ　暁明
人生の晴れ間信じて耐える日日　弘明
子を連れて晴れ間の虹へ手を挙げる　のぼる
人生の晴れ間余りに短かすぎ　登美也
晴れ間から陽ざしが告げる春の音　潮音
きれぎれの晴れ間をひた走りに走り　七面山
地下街に住んで晴れ間知らず老い　福水

人生の晴れ間うれしい詩が生れ　虹汀
断絶へ初孫晴れ間見せてくれ　昌道
鯉のぼり晴れ間に子の夢親の夢　潮音
斗病の日課晴れ間の海へ佇つ　潮音
晴れざれば忘れざりしを梅雨の傘　弘生
割り切って心へ晴れ間取りもどし　洋々
落魄の肩に当っている晴れ間　伊津志
晴れ間もう線路に陽炎燃え立たせ　紫浪
父病めば晴れ間なき日をみな無口　迎歩
一隅の晴れ間にのぞく空の藍　實
逝った子へ晴れ間に遠い母の胸　広坊
金色の斜光の瑞雲神々し　静枝
屈辱に耐えて晴れ間に来た余生　肖二
人生の晴れ間が欲しい日々の手記　凡九郎
晴れ間消え背中合せの倦怠期　藤持
川とんぼゴミと流れて行く晴れ間　一郎
嘘のよな晴れ間台風の眼が通り　肖二
嫁の荷が晴れ間を待って積み出され　潮花

佳

九階まで同じ晴れ間となって梅雨　可住
晴れ間から泥んこ帰りが帰還する　秀峰
鍵っ子の慰め役となる晴れ間　克枝
独り旅晴れ間の夕陽へよぎる過去　富子
被災地の晴れ間無情な陽が覗き　与根一

人

五十年晴れ間晴れ間を縫うて生き　虹汀

地

のら犬も何か探しに出る晴れ間　本陰棒

天

退院で家のむら雲吹き払い　正則

時間

都倉求芽選

すれ違う時間を結ぶ伝言板　潮音
ツィているパチンコ閉店時間です　国彦
すれ違い夫婦が時間持て余まし　香珠夫
生命は時間の勝負救急車　巡歩
絶好のチャンスが時間切れとなり　弘朗
震駭のニュース時間を繰り延べて　代仕男
時間内におさめてアナウンサーの腕　弘生
いい意見出だしたとこで時間切れ　暁明
時間の魔力憎しみも風化する　紘
時間気にせぬ年寄りで混む法話　国彦
平等に時間は与えられてる筈ですが　凡九郎
もうこんな時間ですかと話好き　七面山
真打ちが出るまで時間埋める役　肖二
時間待ちちょっと一杯が乗り遅れ　里風
運鈍根時間気にせぬたくましさ　伊津志
こんな時間電話のベルで胸騒ぎ　松花
万策のあとは時間の裁き待つ　本陰棒
時間長く感じて恋終る　道夫
お化粧の時間が長い色直し　いわを
こま切れの時間で主婦の日が暮れる　無人
駅からは五分こんな距離にまどわされ　里風
寝る時間惜んで爪に灯をともし　一風
やまかけておいても時間遅れて来　潮花
定刻に来て善人の気は満ちる　雅風
タイムスイッチ妻がしばらく寝る時間　南奉
時差ぼけを乗せて観光バスは行く　どんたく
お役所は時間きっちり扉を閉める　伶人
予定より長い手術へ立ち歩き　芳仙
時間厳守できて受付けをやらされる　素身郎
この時間私が買うたとコマーシャル　弘生
時間待ちと見たかウエイトレスも寄って来ず　一風
欲しくないコーヒー飲んで時間待ち　春日
来ぬ客へ無為な時間をもて余まし　近江
時間いっぱい横綱の顔こわくなり　岩光

佳

出演の時間動悸がまだ止まず　潮花
時間にはルーズな母で太ってる　千寿子
時間厳守いつもの人がまた来ない　重人
同時中継眠い時間に見るテレビ　バット
待ち時間友達出来る診療所　綾女

人

待たされた時間忘れて恋する日　克枝

地

きっちりと無口は時間だけまもり　紫香

天

時間をくれと亭主から折れる　紘

軸

窓口が時間をタテの石頭

51年度二賞発表と同人総会は10月3日(日)に決定しました。

川柳塔社

初歩教室

題 ―「酔」―

本田恵二朗

―努力がなくては成果は無い―
―学ぶ心さえあれば万物全て師である―
―自分を励す言葉を常に心の中に持て―
これら一連の名言はどなたが述べられたのか私は失念したが常に脳裡に生き続けている。走り過ぎず、力み過ぎず、静かな心理で描写する作句態度を特に進言したい私である。

御近所の犬をなかせて帰る酔い　度
（また酔ってるなと隣の犬に言われ）
酔いました十八番の歌も舌足らず　忠吾良
（十八番の歌がもつれるほどに酔い）
まだ愚痴が云えるほどそんなに酔っていず　保夫
（骨まで酔いがしみたか愚痴が止った）
好きな酒今日は酔わない見合の日　岳麓
（今日だけは酔ってはならぬ見合席）
春の夜の甘い感触に酔うてみる　寿子
（春宵の感触甘く酔いしれる）
酔うた眼に女房天女に見えもせず　江水
（酔眼へ妻が天女でない安堵）
酔ったふりして老いの足ごまかせず　静子
（老いの足酔った振りではごまかせず）
酔ってても妻に寿司箱買うて帰え　鐘堂
（酔ってても妻へ寿司折忘れない）
酔いつぶれたふりして密談みんな聞き　瓢太
（酔ったふりして密談を盗み聞き）
酔うほどに奇麗さの増す花の下　頼次
（酔眼へ花にっこりと媚びてくれ）
（酔うほどに愛妻だんだん花に見え）
ほろ酔いが呂律に回わる祝酒　紘
（お芽出度い酔いが呂律ににじみ出る）
雰囲気が好きです下戸は隅で酔い　同
（下戸のくせムードに酔える芸を持ち）
白酒に酔うて女のかしましい　日々子
（白酒の呂律で雛壇祝われる）
女医さんが診察終ってほろ酔に　同
（診察を終えて女医さんいける口）
傷心の友を酔わせん酒冷える　露杖
（傷心を酔わせてやりたい酒が冷え）
麻酔さめる意識に生きている痛さ　同
（麻酔さめる痛さが戻る生きている）
スクリーンに酔うた余韻のほのぼのと　静枝
れんげ田の花粉に酔うて春惜しむ　同
（れんげ田の花粉に酔うて蜂が舞う）
悪酔いを後のビールの罪を着せ　無人
（悪酔いを燗のかげんのせいにする）
酔眼に星も地球もみな回り　同
（酔眼へ星が渦巻き描いている）
合格の通知が父の酔い早め　冬扇
（合格通知看に父のきげん酒）
酔うたらし昔話の父を知る　同
（酔うほどに昔話の出る老父で）
酔うた振りして肩借りる花の下　天人
酔眼もうろう妻に顔あげられず　同
（恐妻家の酔眼あわれ土下座する）
陣中見舞をかねて酔いに来る　翁童
（陣中見舞かねてたっぷり酔いにくる）
花見酒桜があきれるほどに酔い　同
（夜桜をあきれさせてる千鳥足）
子は昼寝ママはドラマに酔うている　道子
酔いざめの水蛇口からのどが鳴り　同
（酔いざめが蛇口にがぶりついている）
酔うほどに心の膿がどっと出る　大成
自然美に酔いきる時の独りぼち　同
（自然美に酔うとき孤独感しきり）
酔えば泣く男涙に愛嬌あり　藤持
（泣上戸の涙袋がいま破れ）
酔漢の世間を叱る酒の声　同
（世を叱り政治を叱る酒の声）
むりやりに酔わせた客をもて余し　慶彦
ほろ酔いの夜道軍歌で歩調とり　同
（ほろ酔いの軍歌が千鳥にゆれて行く）
酔えないから酒の肴にされるだけ　那智子
（酔えぬ宵酒の肴にされただけ）
差向いほどよく酔わせ口説いてる　同
（差向いほどよく酔わす下心）
旅の宿酔うほど飲まず聞く民話　貞祐
（旅の宿ほどよく酔うて聞く民話）
酔うほどに過去の栄光に触れてくる　同
（酔うほどに古い栄光ちらつかせ）
生々と萠えて万象春に酔う　軒太楼
（生々と萠え立つ春に酔う万象）
山菜の料理が気に召す酔い心地　同

（酔いきげん山菜料理がお気に召し）
上席が去んで幹事も酔いそめる　同
酔うた音させて今夜も午前さま　正則
（千鳥足の音で戻った午前さま）
酔いがさめ昨夜のことを噛みしめる　同
（二日酔ゆんべのことを少し悔い）
美技の出るバレーボールに客は酔い　同
（バレー戦美技また美技に酔わされる）
夢に見る亡父はいつでもいい機嫌　昭治
（夢に来る亡父はいつもの酔いきげん）

縄のれん角栄三木がと呼び捨てる　三十四
爺ちゃんの酔い除州除州なり　同
（春おぼろ除州へ除州へと祖父の酔い）
酔ってない酔ってないよと千鳥足　幸道夫
独り酔う酒買いに出る風の中　同
気にくわぬ電柱がある酔うている　伊津志
太平に酔うて汚職にひっかかり　同
酔えばまた娘の嫌う唄が出る　柳五郎
花の下恩師の酔態見てしまい　同
二級酒にかえる幹事の酔いの読み　同
人よりは先に酔えない損な酒　利美
酔態を子には見せない父の酔い　同

題―土―六月二十日締切（八月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

★

▼篠山デカンショ踊吟行・8月17日（火）18日（水）―兼題―暑い・自由・料理・音頭・訪ねる・終点。（詳細次号）担当鬼遊・岳人

私のメモ

吉田水車

以前、NHKテレビの「この人と語ろう」でゲストの大山王将が勝負の苦心どころを問われたとき「どうしたら捨てることが出来るかに一番心を使う」と話されたのは、かつて路郎先生も作句の心構えとして、いさぎよく句を捨てることだ。と訓されたことと思いあわせてまことに名人の至言であると趣き深く拝聴した次第である。すくなくとも私の作句態度としては、なかなか捨てることがむずかしいので、どの句をとっても捨てるために作ったものとてはないような気がするし、それはそれなりに鍖骨のおもいがあって捨てるにしのびないものばかりであるという経験を味わっている。それだからといって句のすべてが無欠のものとはむろんいえない。それがために懊悩苦心しているのであって、またそうした中から、少しでも完全に近づけたら精進の甲斐もあるというものである。

ふるさとの川柳ニュース

八木摩天郎

◎柄井川柳点の柳樽二十四編その後の狂句百年の時代を経た古句時代であるが、この程私の方の伏見茂美さん宅から折揚笠「浪速の月」の川柳本が見付かった。この本は天保癸卯と云うので柳樽の最終から数年で堺・泉大津・岸和田・富田林方面の入選句も掲載され天地人の三才句は絵入で描写されている。古川柳本の尠い時に大きな発見だと嬉んでいる。狂句川柳にも力を入れたその時代がよく偲ばれ、思わぬ収穫であった。

◎南海電鉄川柳会で明治三十六年作詩の、大和田建樹作詩、南海鉄道唱歌がある事を知った。市電の唱歌や各鉄道唱歌と大いに作句され、作曲された大和田建樹の活躍振が偲ばれる。今これを列記すると左の如くである。曲は大和田建樹作歌作曲の、「汽笛一声新橋を」と同一のように思料する。

◎堺市農協のため川柳教室は課外教育の意味で五月二十三日午前十時堺市錦之町西三丁の画家葛村啓一郎氏宅を訪問、堺まつり、二巻煎茶、抹茶の製法の8ミリフィルムを観賞、午後は教室へ帰り秀句の鑑賞作句等を了し、茶の歴史と堺との関係等眼で見る知識の収得であった。

◎隠岐観光に力を尽してくれた松江の川柳人が、一年振りに路郎忌川柳会に来る。鳴戸観潮吟行したいと云う松江の柳人は祥月氏以下十名の様子、スバラシイ吟行句会であるよう念願しているが目下計画中らしいようである

第二百九十九回（五十一年度第五回）

大萬川柳

「ふんぎり」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百七十五句

入選　六十八句

ふんぎりの裏を諭されても聞かず　大阪　儀一

廃業のふんぎりつかずに居る赤字　和歌山　富子

ふんぎりもあなた任せの老いの坂　和歌山　久子

ふんぎりの引金うれしい友の檄　大阪　頂留子

ふんぎりへ蛙くるりと向きを変え　今治　宵明

予備校にふんぎりつけて継ぐのれん　宝塚　静馬

天の声地の声私をふんぎらせ　鳥取　秋女

ふんぎりを迫る世間の風あたり　富田林　花梢

ふんぎりがつくと鏡もよく笑い　貝塚　つき子

再婚にふんぎりついた日の眩し　鳥取　露杖

ふんぎりをつけて面影ふり払う　八尾　夕花

ふんぎりをつけねば彼女とられそう　大阪　文秋

ふんぎりへ寝返りばかりする夫　大阪　智子

ふんぎりへ小さい義理が邪魔をする　大阪　好一

ふんぎりへあとの一歩が遠すぎる　和歌山　幸

歯医者へ行くふんぎりさえもつかぬまま　倉吉　弘朗

八起きして又ふんぎりの線に立ち　和歌山　寿子

政治家にふんぎりつかぬあまい汁　今治　純平

ふんぎりがつかぬ女の業に泣き　今治　有里

女房の方がふんぎりよい度胸　大阪　一栄

独身というふんぎりでデザイナー　鳥取　日満

ふんぎりがつけば何でもない話　和歌山　としよ

迷い出したはふんぎりをつけてから　堺　天笑

空意地を張ってふんぎり宙に浮き　大阪　柳信

ふんぎりに助言がほしい程迷い　泉北　春栄

ふんぎりのつかぬ一つは父母の老い　倉敷　圭子

ふんぎりが一家心中とは悲し　松江　与根一

さいころを振ってふんぎりつけよう　寝屋川　度

妻が居て子がいてふんぎりまだ迷い　和歌山　太茂津

ブライドが許さずふんぎり宙を舞う　島根　軒太楼

ふんぎりのついた夜明けが美しい　八尾　美幸

脱サラというふんぎりへ北の風　倉敷　里風

作業服着るふんぎりが道ひらき　神戸　どんたく

ふんぎりをつけたか爪を切ってくる　神戸　要保

ふんぎりをつけるに惜しい手切金　尼崎　利美

ふんぎりが無駄でなかった鯉のぼり　倉敷　白水

ふんぎりをつけろと金を握らされ　熊本　芳仙

ふんぎりはまだかまだかと夜が白む　奈良　本蔭棒

ふんぎりがつくと男の顔になる　奈良　都詩

ふんぎりをつけてと胎児腹を蹴り　鳥取　洋々

ふんぎりはまだ石橋を叩いてる　神戸　牧人

うますぎる話即座にふんぎれず　松原　史好

ふんぎりをつける一人の旅に出る　大阪　君子

ふんぎりがついた時には四面楚歌　八尾　鬼遊

ふんぎりをつけた家裁でもめ直し　箕面　一本杉

ふんぎりたいデートへ喜劇をる盛　堺　一二三

女　千万子

履歴書を書く決心の父の背　堺　千万子

仲人もふんぎり悪いのにあきれ　藤井寺　吸江

ふんぎりをつけてと決意の胸を張る　和歌山　与史

脱サラへふんぎりつかぬ定期券

ふんぎってからは横目もふらず貯め

ふんぎってからは静かになる寝息

尻に火がついてふんぎりやっとつけ

ふんぎりへ実印きつくきつく押す

ふんぎりのつかぬ吊革やけに揺れ

落ちるだけ落ちてふんぎりやっとつき

ふんぎりも酔いがさめれば消えていた

ふんぎりをつけて決意の胸を張る

ふんぎりがつかず敷かれたままでいる

佳　句

ふんぎりの最後の壁となって妻　兵庫　可住
ふんぎりのつかぬ二人に遠花火　富田林　花梢
見栄捨てた時ふんぎりついていた　大阪　智子
ふんぎりをつけてからは一直線　岡山　翁童
ふんぎりへ待ったをかけた財布で　松原　重人
ふんぎりの引き金女が握ってる　八尾　弥生
ふんぎりをつける電話がまだつづく　大阪　弘生
ふんぎりは手紙の束を焼いただけ　富田林　維久子

人ノ句

ふんぎりがつかないわけがくどすぎる　尾鷲　伊津志

地ノ句

ふんぎりがついて椿の花が落ち　今治　純平

天ノ句

ふんぎりのついたダイヤル廻り出し　堺　天笑

選者　吟

ふんぎりがついたか金も借りに来ず

昭和五十一年度
ベストテン（四月現在）

一　**鬼遊**　一二、〇　八尾　一三　牧人　七、五　神戸
二　**花梢**　九、五　富田林　一四　幸　七、〇　和歌山
三　**天笑**　九、五　堺　一五　小路　六、五　寝屋川
四　**維久子**　八、五　富田林　一六　好一　六、五　大阪
五　**百酒**　八、五　西宮　一七　利美　六、〇　尼崎
六　**冨子**　八、五　和歌山　一八　与根一　六、〇　松江
七　**一二三**　八、五　堺　一九　道子　六、〇　大阪
八　**道夫**　八、〇　和歌山　二〇　美子　六、〇　東大阪
九　**吸江**　八、〇　藤井寺　二一　筒子　六、〇　倉敷
一〇　**静馬**　八、〇　宝塚　二二　純平　六、〇　今治
一一　**多久志**　七、五　西宮　二三　古庵　六、〇　笠岡
一二　**美幸**　七、五　八尾　二四　君子　六、〇　大阪

以下略

昭和五十一年度第七回
「指」　五句以内
締切　六月二十五日

第八回
「強引」五句以内
締切　七月二十五日

投句先
〒593　堺市堀上町一―三―七
藤井一二三方
大萬川柳係

▼NHK川柳募集

（土）午前九時十五分NHKラジオ第一放送〝老後をたのしく〟の時間です。

▼締切が迫っているので今スグハガキへ作句してください。あなたの玉句が全国へ流れます。

六月は左記の如く募集しています。課題は「雨傘」選者は川村好郎。用紙ハガキにて三句以内。締切六月十日投句先＝〒540大阪市東区馬場町NHK近畿本部「老後をたのしく係」発表は六月二十六日

一分間の柳論

伊藤茶仏

昨年の五月号の「高成長時代と、福祉時代の、大会について」を読んで馬場魚山氏の日常生活を知っている私は、ドカンと胸をつかれた。車椅子が、すべてに優先する先進福祉諸国と。車椅子を自由に操作出来ない福祉後進国日本とは。身体に欠陥を持つ人たちにとって、格差は余りにも大きすぎる。身障者の投書から、舗路や公共施設の一部に、スロープが急設されても点と点を結ぶ線がつながれていない。日常、身体の障害に、病床に臥せ、病魔と闘いながら川柳に生き甲斐を求める柳友には、川柳をする楽しみ、投句する自由がある。魚山氏の提言は五体満足な私達への警鐘である。ご指摘のように、川柳大会は祭典であり参加することに意義がある。とするならば、清記とか、選句その他主催者側に、面倒な点があっても、工夫をこらすことによって、難事も解消すると断言したい。長期療養のため病床にある柳人、身体障害者の柳友に、温かい愛の手を。

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼中島生々庵・小石主幹ご夫妻の句画展から作品を「芸術春秋」や「医家芸術」に大きく紹介された。

▼麻生葭乃先生は二月初旬に腰部の筋肉痛をおこされ湿布療法などをしているが一進一退とのこと。

▼大森風来子句碑除幕並びに記念川柳大会は四月二十五日（日）午前十時から吉備津神社内摂社宇賀神社で開催、好天に恵まれてすこぶる盛会であった。前夜祭には本社から尼緑之助・本田恵二朗・河村日満・岡崎祥月氏らをはじめ、高鷲亜鈍氏も参加された。当日は中島生々庵主幹をはじめ、更に各地より同人多数の出席で華やかな交歓を持った本田恵二朗・橘高薫風・板尾岳人の諸氏がそれぞれ天地人位の栢を獲得された。なお生々庵主幹は選者を代表して、また本田恵二朗氏は友人を代表して玉串を奉奠された。

▼川柳高知二百号記念誌上川柳大会—兼題（3句吐）「触れる」北村泰章選「海」瀬戸海州選「咲く」樫谷桂緑選「遠い」奴田原紅雨選「窓」川竹松風選。締切6月末日、発表九月号。賞品各題秀句にトロフィー。応募方法—各題ごとに別紙使用のこと。〒780高知市大川筋一の三の二九高知川柳社。

▼第4回ふあうすと賞は定金冬二氏に輝いた。—一〇〇挺のバイオリンには負けられぬ—ほか四句。同紋太賞は酒谷愛郷氏が獲得—酔いどれの父に抱かれる終の章—ほか四句。

▼川柳きやり第8回周魚賞受賞作品を五月号で発表。周魚賞銀盃—働いている長生きをうらやまれ—竹本瓢太郎氏。同賞—この人の言葉で決る徳を持ち—島崎咲子氏。

▼川柳研究50年度賞は—第一席—緋緘を着てさまよえる秋の草—亀田翠亭氏。第二席—盲目を目覚めの刹那意識する—山本良吉氏にきまり、5月16日の大会に表彰される。

▼川柳宮城野四月号で50年度の最優秀作を発表—帰化草の憎まれながら実を弾き—斎藤涙光氏。

▼川柳大阪四百号記念大会で総合得点賞第一位は岩本雀踊子氏、二位は内海幸生氏、三位は野坂つき子さんが獲得。

▼川柳能因（福島県）は四月号で四百号を迎えた。

▼現代川柳（15号）が復刊した。編集兼発行者・池口呑歩。（〒110東京都台東区上野公園12—45—4）

▼第19回近県並びに創立20周年記念川柳大会は9月5日（日）午前9時から、竹原福祉会館大広間（予定）で開催。詳細次号以下。

▼大陸川柳作家同窓会（第12回目）は51年9月25日（土）正午開場、3時開会。（前夜懇話会、9月24日（金）午後5時開会）所—桂浜荘、高知市浦戸桂浜公園内（〒781—02）同窓会一泊2食他¥5500（9・25—26朝）詳細は〒670姫路市北条二五〇・40・1大井正夫。

▼さいたま二百号記念「埼玉川柳大会」が8月29日埼玉県労働会館で開催。冨士野鞍馬氏は宿題「担う」の選者として出席される。投句者の課題は—祝宴・似合う・控える・夜景・くだもの・ゴロゴロ・うろ覚え・投句先〒338与野市下落合五七八—大武政徳宛。

▼第11回山陰川柳大会が5月3日、東伯川柳会主催（清水一保氏会長）で開催。若本多久志副理事長は選者として出席。総合第一位は両川洋々、第二位は津川紫吻、第三位は尼緑之助諸氏が獲得。千代、瑞枝、花子諸氏も出席。盛会。

▼川柳たけはら5月号は三宅不朽氏祝退院句会を発表その日の成績第一位は小島蘭幸氏。

▼縄（季刊）第3号は宮田あきら氏の「現代川柳開眼」が読み物の柱となっている。一部四百円（〒共）発行所〒601京都市南区東九条西河辺町三〇。

▼柳樽寺川柳会川柳人編集の住所変更。〒160東京都新宿区坂町二七、四谷フラワーマンション五〇二—三室天翠。

▼林蒼蛇楼氏（ハワイ）から—磯島三石氏は心臓を患い入院中です。私も体調をくずし声も出難く眼も焦点が定まらぬ現状です。本誌三月号のアロハ・ハワイの記事はよい語り草になって

いますと。

▼金子呑風氏（上田市）から—呑風句碑洗・お花見川柳会の寄せ書拝受。

▼大阪日日新聞（5月7日付）に〝川柳寄席〟が著者の写真入りで紹介された。「面白く読める—川柳寄席—不二田一三夫さんが出版」—台本の負けアドリブへ拍手くる—など、いかにもこの作者らしい視点の川柳。とある。

▼松本波郎氏（大阪市）夫人延子さんが5月7日朝、南大阪病院で心筋梗塞のため死去。薫風氏が通夜に駆けつけられた。

▽同人の動向△

▼西尾栞氏（八尾市）は肋間神経痛で日頃の快活さがやや薄れ、目下治療中。

▼川村好郎氏（高石市）は5月9日の吉永川柳社創立30周年記念川柳大会へ選者として出席、盛会。最近は幹部諸氏、各地へ選者として出席する機会が多くなった。

▼田垣方大氏（倉敷市）から—やはり時計は止まっていました。作句をしないとダメです。新人のつもりで勉強しますと。

▼落合恩月氏（東大阪市）から—星埜兄兄さん（津島市）と会いました。函館にいたころ青柳氏や白眼子氏との交遊関係が話題になりました。

▼小西無鬼氏（兵庫県）から—栞氏と相談中ですが今年のデカンショ祭には皆様のお越しを待っていますと

▼川口弘生氏（大阪市）から—北川春巣先生に因んで会名を「城北川柳会」に変え第一回句会を4月27日にもちました。

▼久米奈良子さん（東大阪市）はさきほど催された第34回日本書芸院会員展に堂々特選の栄に輝やかれた。おめでとうございます。

▼野村太茂津氏（和歌山市）は急性肝炎で日赤病院第三内科一〇五号室に入院。ただし食欲旺盛、熱は平常とのお元気な筆跡にホッとしたものの充分ご養生を。

▼山田季賛氏（高槻市）は病魔との戦いに必死で、その不屈の精神力には、お便りをいただくたびに感心している。ガンばってくださいよ。

▼津守柳信さん（大阪市）から—南柳は老衰で只今入院中ですが近日中退院の予定です。

▼誤植訂正—三月号P924行目は「綻びへ飾りボタンが引っかかり—小砂白汀。

▼堀内暁風氏（大洲市）は三月一日死去、行年七十八歳。水郷川柳社の顧問。—辞世—この世ではもう用ずみで行く浄土—静光院信誉暁風居士。（米沢暁明氏から）

▽旅　信△

▼島居百酒氏（西宮市）はパリ、ニースへ出張、5月中旬に帰国される由。

▼西いわを氏（藤井寺市）から—会社の招待で浜松へ来ています。—天竜川水枯れている松みどり—いわを

▼樫谷漫柳氏（伊丹市）から—隠岐の島へ行き、そこで句をまとめましたが川柳をしてよかったと喜んでいます。—YSで流島のコース隠岐へ着き—漫柳。

▽句　会△

▼**堺川柳会**—6月12日6時から—八木摩天郎居—題—夢・傷・サービス。席題一題・投句先〒590堺市九間町東二丁一の七、八木摩天郎宛。

▼**南海川柳会**—友ヶ島吟行は6月13日（日）題—行き過ぎ・本音・二の舞。

▼**南大阪川柳会**—6月20日午後6時から—題—科学・おとな・願い・花壇。会場—松崎町三丁目大萬。

▼**川柳東大阪**—6月26日午後6時から—会場は東大阪市中央公民館二階第二集会室—題—道楽・噂・港・レーダー。（投句、50円切手三枚同封）投句先東大阪市下小阪7の11、竹中肖二宛。

—**編集部から**—原稿は月末までにお送りください。

新同人紹介

太田亀甲（おおたきこう）

—白汀・早苗・緑之助・薫風—推薦

本社五月句会

会場　金属会館
七日　午後六時

連休あけの五月句会は、毎年心配するのだが、今年も七十名を越す盛会である。開会するまでに幹事の重人さんに椅子の追加を頼むなど、うれしいことである。

今月の柳話は菊沢小松園氏である。日本は言霊（ことだま）の国とか、言富みの国とか云われていると前置きして「ことば」について話された。

川柳人はよほど〝ことば〟を大切にしないと正しい文学にならない。例えば〝馬鹿〟ということを表わすのにも、いくつぐらい知っているか、とちょっと書いてみても—馬鹿・阿呆・ぼんやりと、二十くらいならべ、そして少しでも〝言葉の持ち駒〟を多く持つ強みや便利さを強調された。

各選者の選がすむまでのわずかの時だったが、生々庵主幹から〝生々楽天〟刊行記念パーティの盛会へ感謝の意を表された。

今月の月間賞杯は小出智子さんが獲得。

（進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊）

出席—与呂志・重人・古方・雅風・庸佑・滋雀・蘭・道夫・花梢・寿美子・右近・水客・潮花・紫香・恵美子・与史・としよ・千寿子・漫柳・吸江・維久子・一三夫・柳宏子・摩天郎・誓二・眉水・つき子・瓢太・多久志・一舟・夕花・酔々・冬二・栞・千万子・肖二・綾女・双虎・千梢・葛城・〆女・史好・儀一・恒明・美幸・喜風・酔升・三十四・静馬・一二三・文秋・あいき・智子・好郎・幸生・静歩・頂留子・川狂子・岳人・凡九郎・勝晴・薫風・鬼遊・敏・古啓・鎮彦・雀踊子・弥生・小松園・生々庵・葉子。

席題「台所」　福浦勝晴選

台所で冷であふっている気配　寿美子
徳利を下げ台所へせかしに来　紫香
台所頭を冷やすとこに決め　川狂子
台所月賦月賦で電化され　酔升
台所へ女二人は揉めるもと　瓢太
ゴキブリが一匹台所の悲鳴　三十四
台所の窓から妻の朝が明け　〆女
五月晴妻は素足の台所　三十四
俎板のくぼみに母の歴史あり　〆女
台所に立って女をとり戻す　つき子
台所だけが苦手の妻の留守　酔升
裸婦の絵がある男ぐらしの台所　冬二
台所用品まで外貨のデザイン料　恵美子
台所の隅は涙の捨て処　柳宏子
台所テレビドラマへ間に合わせ　鬼遊
台所女の業を積んでおり　喜風
台所又お茶碗の割れた音　儀一
日曜の台所から若い歌　右近
台所へ声をかけつつ王手飛車　紫香
台所頼む娘があり妻の旅　重人
台所妻のリズムになる鉋丁　潮花
台所男ウロウロ叱られる　蘭
サラリーが素直に語る台所　維久子
台所のタワシ買うにも二人連れ　静馬
ハムエッグの声が明るい台所　静歩
内縁のままの小さな台所　雀踊子
漬物をきざむリズムの台所　漫柳
台所妻と別れてから久し　凡九郎
台所婦唱夫随のカッポウ着　花梢
妻起きたらし台所から朝の音　庸佑
台所此処は私のお城です　三十四
台所ええにおいやなとのぞかれる　敏
台所臭ぎ分けている御用聞き　漫柳
台所昨夜の罪を切り刻む　美幸
台所で鍋が焦げてる長電話　牧人
家中の笑い初まる台所　川狂子
台所やりくる知恵を煮つめてる　滋雀
台所の方では別なものを喰べ　紫香
押売りに出刃が見えてる台所　栞
風疹の子がやっと寝ついた台所　一三夫
慶ろこびを皿に盛ってる台所　勝晴
過激派の主婦です淋しい台所

席題「糸口」　山添眉水選

糸口をつかんだらしく強気なり　庸佑
放談の中で糸口つかんで来　潮花
母の涙が自白の糸口となる　三十四
糸口をたぐればやはり女いる　一三夫
罪の匂いする糸口がすてである　雀踊子
糸口へ男は死んだふりをする　岳人

ピーナッを解く糸口がぼけてくる　肖二
糸口がほぐれかけてる隠しごと　与呂志
糸口はこどもの描いたモンタージュ　静馬
五里霧中糸口探る目が赤い　柳宏子
糸口を見つけた途端駅に着き　栞
糸口へ少々自腹切っておく　恒明
糸口をつかんだらしいあわてよう　摩天郎
仲人が話しの糸口つけて呉れ　肖二
新婚旅行糸口のない二人共　川狂子
お茶ばかり飲んで糸口みつからず　吸江
灰皿の中に糸口捨ててあり　牧人
糸口は釦を付けてあげてから　誓二
糸口がほぐれてからの多弁癖　綾女
糸口をつかんだ靴を揃えられ　維久子
糸口がゆうべの夢の中にある　智子
糸口へ都会は死角の多いとこ　雀踊子
糸口へ妻悪る者にされている　雀踊子
うつむいた指で糸口さぐってる　度
糸口に毒がないかと橋渡る　鎮彦
糸口を引き出すように出す煙草　紫香
きっかけを作って苺盛ってみる　つき子
八方美人に糸口を盗まれる　文秋
糸口は奥の広さを知らさない　凡九郎
糸口を知っていそうな猫の耳　冬二
糸口から芋づる式に逮捕され　眉水

兼題「柳」　高杉鬼遊選

道風の柳其の時風が吹き　洛酔
噂七十五日柳新芽吹く　幸太郎
夜が来て人も柳も夜になる　冬二
舞台暗転柳で春のお濠端　誓二
ケ・セラ・セラ柳に柳の風が吹き　静歩
川柳蛇の目の傘を恋しがり　としよ
逆らわぬ柳の枝に意地があり　柳宏子
水郷の唄に合せて柳揺れ　酔升
柳並木ラインダンスの如くゆれ　恒明
美しく出る幽霊で柳選る　弥生
主義のない男で柳嫌いなり　幸生
日本の柳蛙をだまさない　岳人
結納もかざりうれしい柳箸　好郎
伝統を蒲柳の質が重く継ぎ　漫柳
濁っても澄んでも川を見る柳　肖二
そよ風に柳も恋の唄が好き　日満
大阪弁ばかり聞いてる川柳　鎮彦
柳並木男の裏を見ない振り　維久子
そよ風にたわむれ柳は浮気者　一三夫
団地馴れ柳になって聞き流す　千寿子
風強し柳がゴーゴー踊り出す　つき子
七草にふる里偲ぶ柳箸　酔升
柳腰今日はジーパンはいて居る　蘭
柳行李明治の母は捨てぬまま　維久子
公害で柳も蛙も病み細り　千寿子
春愁の柳に銀の雨が降る　〆女
貸ボート柳の陰へ漕ぎよせる　潮花
人生無常死ぬ気柳へ手を合わせ　紫香
なびいても柳は真実失わず　夕花
遍歴のロマン柳行李に詰めてある　静馬
終幕は柳一本立てただけ　恵美子
月蝕の白い風見る猫柳　酔々
柳の芽水の流れを速くする　岳人
逆らわず柳はおじぎして暮し　文秋
柳の下にいる流行らない易者　史好
これが愛か柳の下の泥鰌になる　水客
小次郎のつばめ返しを見た柳　敏
完敗の男に柳芽をふけり　冬二
色街へつづく柳が嘘をつき　雀踊子
柳の木おんなを騙したりしない　冬二
ユーモアの分る柳はよく揺れる　酔々
四月一日柳の下のドジョウ掘る　鬼遊

兼題「一と言」　神谷凡九郎選

踏切でみんな一と言抱いている　道夫
どん底でもいいノーの一と言いえる夫　度
一と言が多くて石にけつまずく　岳人
一と言も言えず尾灯に立ちつくし　静歩
一と言で心洗ってくれる人　重人
一と言をいいたい順がついに来ず　千万子
夕凪の海に一と言置いてくる　道夫
一と言を墓標へ戦没忌に祈る　雅風
酔うた目に位牌一と言ありそうな　幸生
苦労したその一と言に無駄がない　弥生
一と言の重さで枯葉地に落ちる　道夫
一と言を詫びると霧が晴れてくる　夕花
一と言がある日男に突き刺さり　重人
悪る気とは別に一と言口が過ぎ　一二三
一と言のつもりがブレーキかからない　酔升
去り際の一と言ゴメンネですむ女　与呂志
一と言がほしい女は泥まみれ　寿美子
一と言の無理を言わせた人が居る　維久子
あの時の一と言今も懐かしい　瓢太
背信を斬る一と言が見つからぬ　美幸
一と言に夫婦の絆よれてくる　花梢
一と言で方程式が解けてくる　酔々

旅立ちの一と言しばらく抱いている　水客
一と言へ引くに引けない座を作る　維久子
一と言が友を千里の外へ出す　小松園
一と言を奥歯で噛んで待っている　寿美子
一と言はポケツの中で温める　つき子
一と言の重さで吊り橋を渡る　冬二
一と言のはずみが重い胸となる　維久子
一と言がささる自分に負けている　花梢
一と言の波紋にドラマ深くなる　滋雀
一と言が男の肩を押してくれ　水客
一と言もやっぱりうつかりさんらしく　古方
一と言が言えず炎を抱いている　千寿子
すべて「空」一と言それが悟りかも　酔々
中性の一と言多い女です　肖二
お早ようの一と言冷たい都市の顔　雅風
一と言を柩の中へそっといれ　栞
一と言に袈裟斬りされることもある　美幸
一と言を空へいうほど淋しうて　古方
おばあちゃんの一と言だから信じよう　智子
一と言の感謝を妻に言えますか　鬼遊
凡人の一と言練った事を言う　鎮彦
一と言で言える言葉へ或る女　凡九郎

兼題「針」

八木摩天郎選

家庭科は男の子にも針仕事　幸太郎
針供養刺される豆腐何の罪　一栄
病める身に太くも見える細い針　藤持
姑に針のむしろと言う団地　柳信
針小棒大我が田に水を引く　軒太楼
秒針は心のあせり知っていた　祥月
針の孔通らぬ老いを笑い合い　どんたく
一と言が気になり鎖の手を休め　栞
針一本女ひとりの道険し　夕花
女の性針の穴から世間見る　眉水
夫唱婦随針に従う糸のよう　敏
針持てば母の指先き生きてくる　一三夫
採血の鎖へ善意はためらわず　儀一
孫の来る朝を秒針笑いだし　幸生
観光も兼ねた母娘の針供養　双虎
雷へちょっかい出してる避雷針　三十四
針供養錆びているのは見当らず　古方
針使う手付きも馴れた寮住い　文秋
チクチクとたとえ話で針をさし　好一
出稼ぎへ針と糸まで包み込み　吸江
針ふくむ言葉笑顔で受ける嫁　綾女
落し針呪文となえて探す母　綾女
針仕事遣児を立派に育てあげ　酔升
いやいや習うたお針にくらし支えられ　静馬
反目の言葉の針がひっかかり　柳宏子
見よまいと努力している注射針　紫香
針供養折れた同士のよい話　維久子
針の山泣けば迎えに来る童話　岳人
プッツリと刺されて昆虫死にきらず　古方
新妻に針のムシロで無いお城　与呂志
針刺しの針も錆びてる倦怠期　智子
一人泣けばその次も泣く注射針　吸江
受験子に夜なべの針はよく進み　栞
無駄のないまち針をうつ母哀し　道夫
針の穴日毎にうすれゆく悲哀　千万子
針のさが退くべき時を見失う　水客
針のよな苦しい世帯切り回し　川狂子
針含む言葉へ白い歯が笑い　〃女
針の数よんで布団は出来上り　栞
裁かれる時計の針は速くなる　鬼遊
一と針へ想いをこめた娘の晴着　維久子
姑の針の言葉が突き刺さり　肖二
秒針が命をかじる音をたて　雀踊子
おふくろの年にふれた針の穴　雀踊子
嘘っついて針千本の劫を買う　誓二
安楽死させる針などまだ要らぬ　美幸
針の穴母を困まらせないでくれ　恒明
痛くとも私知らんと注射針　誓二
証人喚問針の莚へ座らされ　牧人
大学へ三人あげた針仕事　多久志
針持てば母八十には見えず　史好
ざあますの笑顔の裏に針を秘め　どんたく
不器用な女と針が笑ってる　つき子
針穴にあなどられてる太い指　つき子
見習いの指になじまぬ針は折れ　鎮彦
小心な看護婦さんの注射針　潮花
文字盤に働き通した母が居る　古啓

福永清造著
句集 川柳燈
ご希望の方は送料その他として一部につき百五十円（一部を増すごとに五十円増、郵券でも可）を同封して、著者あてにお申し込みください。
著者住所
〒603 京都市北区北大路通千本東入
福永清造

共学で母親顔負けの針を持ち　一二三
運針の手元は確か古稀の母　右近
ぬい針がピシリと折れた午前二時　寿美子
未亡人きれいに稼ぐ針仕事　静馬
千羽鶴の悲しみを知る妻の針　冬二
釣針のあるピーナッツとは知らず　柳宏子
おばあちゃんの眼に意地悪な針の穴　智子
ママよりもパパが器用な針をもち　花梢
蝶に刺す針なら神も許さるや　水客
一日で仕上げる晴着の針をもち　花梢
針千本のめぬ誓いを女から　多久志
おむつ縫う嫁の可愛いい赤い爪　あいき
新婚のにくまれ口に針がない　静馬
人妻を愛して針踏む気の逢う瀬　雅風
布とん針とともに女は老いていく　花梢
日本の女は千人針を縫う　肖二
針先でつつくに似たりロッキード　摩天郎

兼題「焦れる」　若本多久志選

年上の愛は焦らさず抱いてくれ　日満
監督がバット振りたいほどに焦れ　どんたく
焦れてた人が来るらし同窓会　弘生
待ち呆け焦れてタバコを逆に吸い　登美也
焦らされる手練手管に気がつかず　柳信
焦れて待つ証拠に吸殻へし折られ　一栄
振り向かずただひたすらに焦れたい　寿子
釈迦仏に焦れた女眉を剃る　優
猫の目に焦れる心を見透かされ　洛酔
焦れている応接室へぬるいお茶　恵美子
焦がれたらもうまっしぐら蝶になり　鎮彦
妹が焦れったくなる姉の恋　眉水
渋滞のタクシーミラーに客の焦れ　儀一
合格の自信吉報待ち焦れ　牧人
衆人看視パンダの恋焦れる　史好
民主主義とは焦れったきものと知り　史好
狂乱の焦れを抱いて蛇になる　美幸
焦れてた都会で最初の鍵を買う　古啓
睡蓮の死ぬ程人に焦がれたし　夕花
ドンファンを本気で焦らしている女　つき子
子守唄に焦れて石女かも知れず　水客
老醜の影へ善人さえ焦れる　肖二
焦らされて女いよいよ美しい　一三夫
にえきらぬ彼へふんぎりせまる恋　三十四
受験発表母を焦らしてみたくなる　智子
焦らさせたとこでポルノの幕降りる　雅風
急病に医師の注射も焦れったい　喜風
今月も黒字にならず気が焦せる　誓二
アドバルーンそう焦れるなとすこしゆれ　冬二
高僧の焦れたりしない歩の運び　美幸
焦れったいなかなか空かぬ赤電話　誓二
中年の焦りを妻にいたわられ　雀踊子
焦らされて焦らされて恋持ってかれ　与史
万台が焦れる浪花の五、十、払い　右近
逢いにゆく時刻に髪が気にいらず　夕花
こがれるとは言わず私の夢ですの　栞
焦れてた彼女俺より先に老け　一舟
会うた日の温み焦れる片思い　千万子
飛べる日を待ち焦れてる燕の子　敏
焦れてた椅子で胃を病み脳を病み　一舟
焦れったい心へ静かな藤の花　としよ
焦れて来た心が逃げている煙草　雀踊子
かぶり付き焦れたスターの裾に触れ　滋雀
もう焦れる頃やと浮子に肚読まれ　重人
焦れて居るのを灰皿に見すかされ　右近
三味置いて今宵のひとを待ち焦れ　潮花
歩巾合い焦れる二人の夜の底　千万子
反対側に居るとも知らず待ち焦れ　静馬
春おぼろ月が焦れてる雲の中　一三夫
焦り焦りと寡婦は世間へ鎧着る　小松園
お隣りのビク一杯になる焦り　維久子
能面の心盗んだ足袋の焦れ　幸生
ちぐはぐに炎えてる本気が焦れている　弥生
亡き夫へ焦れる思慕を詩に寄せ　酔升
人恋し瞽女は焦れの旅に出る　美幸
お預けのまんま祝辞がまだ続き　柳宏子
焦れる日は聖書の重さたしかめる　冬二
焦れてる男は聖書抱いている　古啓
身を焦がしつくしたカンナ落ちた朝　柳宏子
焦れている耳へ産声確かなり　智子
焦れてる女に月給訊ねられ　多久志

（河井庸佑・整理）

▼鳴門観潮吟行・7月8・9日・洲本三熊館一泊・会費一万二千円・定員35名・天笑まで

秋田　實主宰・不二田一三夫編集
「漫　才」　復刊第2号！六月中旬発行
各紙で紹介され第1号は売り切れ。（店頭販売はしておりません）
定価・三百円●送料・百四十円
発行所　大阪市生野区勝山南1—14—17
漫才作家くらぶ

花地物壇

川柳東大阪　竹中肖二報

チップ出すまでを仲居はゆきとどき　あいき好一
チップだけ貰えばあとははほっとかれ　綾女
入れ替る女中へチップ出しそびれ　雀踊子
子宝に恵まれ働き蜂になる　正彰
ままならぬ世だせめても宝くじ　好郎
宝くじ買ってる父に声かけず　鎮彦
安物の指輪が妻の宝物　凡九郎
ちっぽけな好意も宝の破片です　鶴声
絵の様に初日彩る昇り竜　誓二
祖父の背の竜が昔は怖わがらせ　古方
気がつけば竜竜神になっていた　美子
一筆で竜書きあげた墨のさえ　肖二
年越しの豆を数えて老いてゆく　一栄
とる年の豆を数えてギョッとする　柳宏子
頭数読んで割勘たしかめる　君子
正札の零を数えてみるばかり　儀一
ゴールインもう待つばかり日を数え　恒明
同姓同名花束がうろたえる　右近
遭難の悔いに花束波に揺れ　度
花束を貰うと握手したくなる

川柳たましま　稲田豊作報

団子鼻この人疑うのは止そう　三辛堂
里帰り父は来たかと言うただけ　朝二
奥さんのリズムで廻る洗濯機　扇水
まな板のリズムが狂う早合点　里風
塵つもる救急箱にある平和　筒子
悪人がはにかんでいる恐怖　八笑人
着ぶくれて心一つが冷えている　誠一
力尽きて遂には檻の飯を食う　林鶴
詫び状が届き己れの非に気づき　克枝
針箱へ明治の節度仕舞う母　千翁
早合点する子無性に可愛くて　慶子
不況風俺の首にもヒヤリと来　よしを
箱庭の視野で世間を観た自潮　黎水
父と子が坐る根株が二つあり　三林坊
子に未来かけて裸の父の唄　静海
はにかみの底に閃く強い意地　一峰
金が要る信仰ことわり心電図　安静
はにかみの度が過ぎ返事せずじまい　麗水
手の届く所に倖せ置いてない　豊作

内海幸生報

菜の花句会

ボート漕ぐ飛沫に青春の詩がある　牧人
パチンコの一発思想もなく転び　鬼遊
保険屋が帰ると金魚浮いている　作二郎
孫の風邪待ってたように母泊まる　紀美代
花の下明日の手形は考えぬ　美幸
浮き雲が終着駅でまだ消えぬ　夕花
一泊へクドクドクドと妻が出る　幸生
浮気性二つの顔を持ち歩き　鶴声
大伽藍雀になりたい屋根の反り　鹿蔵
盃洗に男の野心浮いている　雀踊子
浮雲でこころ定めぬ今日の旅　川狂子
裏腹に泊れと口揃え　綾女
高架下すけた鳩が住んでいる　肖二
校門の桜新入生の肩に散り　誓二
桜咲きこの塀少し高過ぎる　薫風
孫のったポ！ト視線のすみで追い　度
色即是空桜ちるちる奥の院　小松園
殺し文句考えて鳩を抱き寄せる　鎮彦
新妻へ深夜宿直から電話　吉則
満開の下で別れのこと思う　恭太

川柳わかやま　野村太茂津報

嘘のないサインに自分の顔がある　幸
ふれあいは今も蕾の香りする　善彦
奮発が過ぎて女に甘えられ　恒治
奮発をしたがやっぱり父の金　天彦
やれやれと女に戻った妻の顔　雀踊子
ふれあいの遙かな末も信じきり　福水
かりそめのふれあい瞼の裏にすみ　喜美子
ふれあいが涙を光るものにする　凡九郎
ふれあいを導いものに知る逆境　弘生
指定席気が合う人と隣り合い　那智子
ふれあいが心の染みとして残り　与史
汚れ役主役やつぱり主役です　英子
寄せ書きに一人気取っているサイン　和子
やれやれと想えば人生昏がれて　としよ
初節句主役の膳は逃げ廻り　まさ枝
風の中雪はふれあうもの捜す　道夫
刈りあとも主役を信じて案山子　武雄
端午節　今宵主役は哺乳瓶　喜誉司
嫁が来てやれやれ空虚の中に居る　千寿子

いずも川柳会　板垣草丘報

宴会はもてて出世に遠くいる　河南
独り子が許す許さぬもなく家出　草丘
許すから語れと甘い口ぐるま　晴月
宴会の予算気になる舞台裏　鐘堂
許す気か叱る言葉に力なし　夢酔
許すとは言わず後からついてゆく　恵治
発表が人生の岐路起点とす　春梢
許すとの言葉が遅く里帰り　勝治
宴会に出雲人なり安来節　寿年
コーヒーとパン明治はものたらず　祥月
宴会が続く役所の年度末　雪美
親だけが許す仲です二人旅　圭詩朗
隅っこの私服コーヒー置いたまま　可保留
コーヒーは恋を占うように冷え　虎秋

飲む席がもう一つある大安日　八起亭
菜の花を墓前に供え春を告げ　軒太楼
コーヒーを葉飲むよな顔で飲み　みのる
芸達者宴会用の秘書になり　正朗
喜びも悲しみも花に見つめられ　芳子
国会は冠頓発表なき不信　独仙
宴会で踊らされてるとは知らず　早苗
何もかも許し破乱の幕が開き　緑之助

川柳後楽（岡山県）　井上柳五郎報

天真な孫の言葉が心打つ　恒洋
険悪な空気を孫に救われる　佐加恵
外孫への叱言一瞬躊躇する　昌吾
孫に手を引かれ財布の紐緩む　照路
本心は太陽欲しい鉢の花　廉
きれいごと言うて本心にはふれず　哲郎
本心を肚にしまって美辞麗句　柳五郎
拍手を打てば本心よみがえり　幽谷
本心を明せば崩れる絆です　めぐみ
本心を女房に言えぬこともあり　熙
本心をたとえ話として明かし　たけ志
暖かい茶の間仔猫といつもおり　定平
お茶の間に家族の指定席があり　胡風
合格を知らせ茶の間は手をたたき　久米雄
歯車へ油をさしている茶の間　洋之
母と子の心茶の間で距離縮め　夏彦
女手に慣れてしまった耕耘機　勝
福祉の手断る女手の自信　秋月
初孫が来てから似てる処探す　博友

どんぐり川柳会　谷垣史好報

七人の敵斬り抜けて膝まくら　美幸
日曜の朝は子供に急がされ　鬼遊
億のつく商談コーヒ飲みながら　好郎
油断したライオン故郷に遠くいる　真砂
横綱の油断一敗だけで済み　鎮彦
コーヒの匙が物言うように見え　吸江
コーヒーの味ほのぼのと初対面　いわを
油断のならぬ札束が積んである　薫風
足袋をぬぐおんなに油断などはない　岳人
急ぎあし何やら金が入ったらし　小松園
ブラックがいやに苦く感じる日　重夫
天定へ財布の底をのぞき見る　敏雄
優勝に飲むコーヒーの味の良き　喜風
油断すまい七人の敵が狙ってる　甑太
船の旅　人生急ぐことはない　史好

南大阪川柳会　金井文秋報

腹づもりだけで終った父の夢　柳宏子
腹づもりしてても息子信じたい　頂留子
腹づもりまで親方に似て来かけ　一舟
ライバルに見抜かれていた腹づもり　綾女
披露宴の予算聞いとく腹づもり　好郎
マイホーム親父をせびる腹づもり　肖二
腹づもりソロバン妥協してくれず　一栄
マッチの炎のような意気ならもっている　智子
意気だけで舞うておれない奴凧　弘生
意気衝天男さえぎる壁がない　好一
プロローグから一直線は引いてない　凡九郎
甘かった自分等のプロローグ振り返り　誓二
プロローグの暗示だんだん解けてくる　文秋
本番に仲々入らぬプロローグ　蘭
美人からパパと呼ばせる金が消え　滋雀
どこやらに怖いところのある美人　古方
耐えて来たくらしは無駄を除けて買い　正彰
何かある夫の目線が棚へゆく　あいき
なにがなし不用な物は棚に乗せ　鎮彦
神棚に凡夫の願いごとを積む　君子

川柳しんぐう　大矢十郎報

春斗のビラ職安で見る寒さ　大輪
一鉢の春を買って来た都会　雀踊子
出稼ぎの父ちゃん帰る春を待つ　渓水
春めけば禁酒あやしくなってくる　与史
知大に春奪われて嫁き遅れ　寅蔵
吹き抜ける風に心を裁かれる　幸
風のない日の日の丸を国旗とす　道夫
風向きが変り野次馬焼き出され　明
汐風に男のロマン生きている　輝寿
逆わぬから良く廻る風車　金松
追いかけてまで入れてやる里帰り　ふみよ
どうしようもない泥沼へ入れた足　武雄
成長へ入試の苦労懐しみ　千寿子
螺線階段まわって入る春の風　酔々
三百円の玉が一発だけ入り　豊水
全快を祈る妻子がいてくれる　富子
全快へ嬉しい朝の髪洗う　功
病友の全快嬉しくも淋し　まさ子
日の丸に入りきらない庶民の血　道夫
入信の女に説かれ小半日　十郎

ハワイウイロー社　林蒼蛇楼報

つき合えばするめの様な人であり　カロ

佳句地10選（前月号から）

辻　圭　水　選

悩み事秘める笑顔が美しい　喜美代
真実を追えば出世の邪魔になり　たけ志
ため息へ妻は一本つけてくれ　好郎
逆境を生き抜いて来た母静か　〆女
煮豆まだ亡母の味付までいかず　白渓子
平手打ち女の意地が消えてゆく　水客
惚れた弱味どちらも人形になりたがり　小松園
どたん場に立てば器用なうそがつけ　美子
足跡をたどれば夫婦の詩がある　寿子
すれ違い余韻残して行く蛇の目　柳信

つき合いがついに結ばれ子も生まれ　一葉
付き合って見て本性の裏を知り　暁舟
交際費あがりインカム同じこと　紅渓
八面玲瓏匂うばかりに社交術　峯円
信じても娘の交際に悩む母　拝山
隣り合せた椅子から長いおつき合い　彩珉
交際をして見てわかる人の性　小雪
つき合って見直おす頭の下がる人　蒼蛇楼
つき合いは下手でも真心がとめられ　椰子郎
交際の広さは人にある余得　万里歩
世評までつき合う友に左右され　稠雄
交際をよい口実に浮気する　快夢起
つき合いで仕方がないと便を貸し　秀山
趣味の会出ればつき合う友が出来　蒼生
各人種丸くつき合うアロハ州　公女
交際に門閥などは隅におき　河舟
晩酌はやらずつき合い酒は飲む　北海
交際は交際意見は曲げられず　三石
誠実が交際以上にある人気　雪女

川柳たけはら　森井菁居報

還暦や妻が子がいて孫のいて　静水
還暦の夫と歩まん古稀米寿　房子
禁煙の理由は聞かないことにする　蘭幸
手作りにテレビのコツも添えてみる　光子
陽溜りへちんまり頑固な父病みて　文晴
秒針が気になり今日は疲れてる　笑子
淋しさは絵本のページにはさみこみ　寛子
君と僕との小道具に海があるる　菁居
まだだめねひき算だったらだいじょうぶ　愛のみ
入学への親の期待が先走り　紫光
還暦のまぶた静かにとじてみん　不朽
つまずいた影私が起すほかになし　千代美
潔白であるから瞳光ってる　貞子
反抗期の口笛ホッと米をとぐ　一路
木枯しへ逆うように駆けている

公害に耐えて働き蜂の忍　のばら
水鳥の波紋に息吹く朝の池　花炎
苺西瓜が二月の店にある虚構　英詩
言いきればほら消えてゆく風のいろ　酉合
見せられぬテレビへ孫の目がパチリ　かつ子
締め出したほっぺが赤い児を想い　篤史

川柳ささやま　河原みのる報

そばにいるだけで心が開けて来　とよ子
表札に妾とは書かぬ三味の音　越山
雨やどりした表札へ目で詫びる　初音
倖な家表札今も古いまま　村雨
表札がまだ拒んでる町合併　宗珠
つまずいて悟りの道に凝る夫婦　久子
男またお金にならぬことに凝り　可住
淡々と色にも凝った語り口　ひか平
公職に凝った半生なつかしみ　近江
凝り過ぎて婚期にひびく舞扇　健理
修身で凝り固まった父孤独　孝風
凝るほどに淵の深さを測りかね　みのる
手織縞苦心の出来は明治知る　百合子

オーエスケー川柳会　大坂形水報

気味悪い彼のペットは蛇とかげ　一念
一息にきしめんすする里帰り　前田
奥さんによう似たスピッツ旦那連れ　千夢
ここち良い春の陽気がさす欠伸　野生
会議室上司の欠伸移ってき　秀川
オフィスを出て大きく欠伸する　亜成
得意気な話へ欠伸かみころす　一扇
再職へ勝気な妻に支えられ　栄
勝って泣き負けて泣いてる甲子園　みどり
お得意に勝ちをゆずっている打算　有一
中ピ連男に勝ってどうする気　亜也子
負けてやることで穏便保ってる　博泉
文科出は勝につながる世を呪い　聖地

美しく勝つためのルール曲げられず　弥生
うどんから比べコーヒーの馬鹿らしさ　形水
出世してからもうどんでコップ酒　入仙
ペット今日自由が欲しいさわぎよう　好郎

京都塔の会　松川杜的報

糸巻きに一句メモして晴着縫う　明代
是非読んでおきたい本が積んである　誠史
琴爪へ糸はげしい音で切れ　潮花
賽銭にポケットの裸銭投げる　季賛
五十からの勤めへ肩書などいらず　白渓子
ネクタイを選って五十の覇気を持ち　王石
人生の道がむしやらに来た五十　飛鳥
赤鳥居五十数えてみた稲荷　和友
五十回京にすくすく句が育ち　笛珠
人生五十さあ之からと背のびする　葉香
宴席へ浴衣裏着て頭かき　永楽
解く鍵は唯真心があるばかり　蘇堂
愛という公式で解く夫婦　求芽
クリームが解けだすジレッタイ男　客遊子
帯解いて女自分の顔になり　紫香
握手して知るこの人の太っ腹　三光
医療費へカルテの裏はしやべらない　杜的
流水も春がきている音と知る　水客

川柳まつえ　岡崎祥月報

月給の中味見せ合う新社員　英城
嘘だから君の目玉は光らない　巡歩
満開の花が奇麗な過疎の村　鳳人
証人がしなりぐなりと嘘で逃げ　登美也
満開を待っておれない花の酒　巷雨
少年の眼に満開のいさぎよし　大鳥
妻が魔女だったらと思う月給日　鶴丸
満開をほめて地酒の味まろし　孤呂二
月給袋に泌みついて来た不況風　逓児
嘘をつくようになって高校三年生　叮紅
満開ださくらだ酒の酔いまわる　祥月

駒つなぎ川柳会　岸　南柳報

人形によくにたかわいいお嫁さん　ひろ子
マネキンの化粧を変えるアイシャドウ　綾女
人形のようにと願い雛を買う　昌女
人形にもの言うことの多い夜　宏子
人形もバレーが出来ますオルゴール　茂子
お人形がママに似てると手離さず　儀一
人形の顔によく似た人形師　善信
人形で暮らして明日は明日の風　南柳
女心をくすぐって行く春の風　石捨
好きと言う言葉を女じっと待ち　誓二
菜の花へ女心は蝶となる　肖二
あれから十年女心にむちを打ち　摩天郎
蝶となる女心は炎えている　鎮彦
或るときの女心のひえびえと　はやを
あさはかな女心は罪をだく　恒明
花言葉女の心そえてある　美代
その言葉女心が待っていた　祇風
流されて女心はない飯場　柳信
打ちあける女心のすきまかぜ　つとむ
そのままにわかれ女に疼くもの　小松園

和歌山七面句会　中筋　三幸報

Uターンしてから人生狂い出し　知也
挨拶も鏡の中で美容院　富子
不倫なる恋の味方の赤電話　晶子
赤電で恋を育てているヤング　幸宏
仲人にUターン禁止の釘さされ　豊吉
名調子句会挨拶三幸さん　光治
転宅で長々挨拶隣り組　其夕
挨拶もそこそこにして花の宴　勇次
お互にUターン出来ぬ妻と吾れ　凡夫
うたがえば切なしだけど引返す　隆恵
Uターンしかねて彼の後を追う　敏夫
入学式衣装競べの御挨拶　たか子
メロドラマだからUターン出来る恋　ふく代
アベックに挨拶してる方も照れ　三幸
脅迫の小道具になる赤電話　博泉報

三井が丘川柳会　高田　亜也子

青が好き青は愁いの影を曳く　世山
ボーッとした頭が善人らしく見え　亜句童
三十路来てまだまだ青いと親父言う　琴音
カーテンに足が生えてるかくれんぼ　公子
熱の子の頭に何度も手がかよい　加代子
青写真片手夢見る新婚さん　てまり
謎ひめて青一色で着る細身　亜鈍
カーテンを開く勇気を持てた朝　亜成
説教の言葉は頭上を通り抜け　博泉
頭金人質にして家を建て　三郎
カーテンをひいて我家をとりもどす　度
青空一杯わがものとする鳶の輪　柳宏子
まだ熟す可能を秘めてる青さです　凡九郎
郷愁の瞳に青い空母の顔　〆女
青い樹をいっそう青く雨上る　鬼遊
花散らす風にカーテン揺れやまず　小松園
保護色に安心してる青蛙　形水
ハネムーンカーテン重く垂れている　牧人
ドラの音に母の頭の見えかくれ　ミチ子
合歓の木の青い眠りの下で逢う　薫風

虹川柳倶楽部　新岡回天子報

負けたのを終戦などといい言葉　五木
待つ時間掌に花びらを受けて閉ず　照沖
二時間も待って診察二分間　広坊
梅雨晴間増水の土堤人走る　実
地下街から晴れ間の街へまぶしく出　岩光
二の腕で顔の汗ふく汐干狩　一竿
雨あがり晴れ間に傘を持て余し　春吉
ストストとストの晴間の見えぬスト　金志郎
降参と言わずルバング三十年　久隆
特売場女の性をさらけ出し　勝一
時間迄喋る落語の羽織脱ぎ　紫浪
美しい怖いやさしい富士を観る　虹汀
勝ち負けはどちらか分秒待つ発表　回天子

西宮北口句会　小浜　牧人報

相場表妻にも少し欲があり　正祐
下手ながら若しやの欲に操られ　ろ山
長生きがしたくつぎつぎ欲を捨て　牧人
欲のない顔で万年平社員　絹江
伸びる芽を教育ママが摘んでいる　いづみ
地下街の延びに戸惑う出入口　清川
伸びる子へ母の編む手が追つ付かず　千世子
夜が更けてわたし一人の下駄の音　総甫
あとになり先になりして夜の道　青壺
遠吠えを寒く聞く夜は寝付かれず　笑女
猫柳恋の芽を摘む人もあり　婦美子
一握りの砂から大事洩れそうな　半歩
地を這うて植輪の影が深くなる　伊升
残像となる人があり彼岸来る　めぐる

南海電鉄川柳会（大阪市）　圭水報

福相と貧相姉妹こうちがい　摩天郎
福相が頭下げたで丸うすみ　圭水
福相になってる酒のほろ加減　正彰
結論を出す福相を見直され　季賛
福相が相好くずす良い話　肖二
福相と言われ肥満の医者通い　儀一
いざこざのない福相な嫁姑　清女
福相を信じ日々子をこせつかず　誓二
福相な耳が結んだ玉の輿　維久子
福相があっても金に見放され　綾女
福相の面は笑顔でぶら下がり　川狂子
絵画展福相な眼に見つめられ　宏子
あきないの景気で福相な顔になり　昌子
福相なお多福に貧相な婿が来る　千万子
福相でおますやっぱり三枚目　柳信
無理をせぬ男に心のこり等はない　鎮彦

暑中広告受付！

本誌五分の一段が二千円
グループをおもちの方も
ご利用ください。
★原稿締切・六月末日
あなたもぜヒ一口

この寸法が四百円
川柳塔社
振替口座大阪
三三三六八番

▼二賞発表と同人総会は10月3日(日)にきまりました。

▼本社への不急のご用件は、なるべく書面でお願いいたします。午前中と夕刻以後のお電話は06—718・3218（不二田宅）へ。（同人名簿の本社局番は271）

募集

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「寝不足」出原敬一選
「金婚」落合思月選
「高官」新岡回天子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

九月号発表（7月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「握りめし」槇田英詩選
「備え」宮尾あいき選
「空の旅」小川恒明選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

一人の遅稿　大ぜい困る

定価 三百五十円（送料29円）
半年分 二千二百五十円（送料共）
一年分 四千二百円（送料共）
昭和五十一年五月二十五日印刷
昭和五十一年六月一日発行
編集兼発行人 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社
郵便番号 542
発行所 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地 川柳塔社
電話大阪・二七一—三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

「川柳寄席」出版記念祝賀句会

日時 六月七日（水）午後六時
会場 金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話 271・3935番

柳話 川村好郎（今月の出題・高杉 鬼遊）

兼題
「向う」不二田一三夫選
「抜ける」山本素郎選
「世界」戸田古方選
「船」橘高薫風選

席題 三題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

7月の兼題 「大空」「巨星」「路」「峰」

・ペンペン草・

表紙の色

★表紙の色には非常に神経を使っている。直原玉青先生がしろうとのぼくにお任せくださっているからだ。時にはご不満もおありと思うが、何事もおっしゃらないから、それだけに気を使っているのに、前号は前々号と同じ色で刷ってしまわれた。原稿をわたす時に、数字をまちがえぬようにするため、前号の表紙へ本号の色見本を付けてわたすことにしている。それがためまちがったらしいが、本が出来たのが4月28日だった。もちろん表紙だけ刷り直すつもりだったが、運わるく連休にひっかかってしまったのである。こうなると連休あけ以後でないと本にならない。で、やむを得ず泣き寝入りとなったことを玉青先生始め皆様におわび申しあげる次第です。

川柳塔の歌

★別掲発表のとおり、残念だが次ぎの機会に力作をまた寄せていただくよう、よろしくお願いいたします。

P・R

★雑誌「漫才」復刊号を出したことはご承知の方も多いとおもう。七、八社の新聞が書いてくれたためだろうが、拙宅へ買いに来た人へ、本誌の編集に使ったものを進呈し、川柳をすすめてみた。そこで感想をきくと、むずかしいと云う。またはおもしろくないという人もいた。川柳とは〝おもしろい〟ものときめてかかっているようである。そういえば「川柳塔の歌」の応募者も、同じような考えで書いたらしいのが何篇かあった。この人たちは標語研究誌が広告してくれたのでそれを見て送稿してくれたのであろう。しかし標語研究家が何人か本誌の購読者になってくれているので、気長にP・Rをしていくつもりでいる。

太陽のない季節

★このようなタイトルでディスク・ジョッキーを書いたことがある。一度、どこかで書いたことがあるが、路郎先生はドンヨリした日がおきらいだった。「雲が頭を押さえつけるようで」と、おっしゃった。そんな時には原稿がおくれて雑誌が句会の日にまにあわぬこともあった。そこへいくとぼくは鈍感なのか、原稿に時と場所はない。したがって名文が書けないわけ。申しわけない。

方向音痴

★最近、新聞社や放送局の人々と会う機会が多くなった。電話ぎらいだが、どうしても会わなくてはならないこともあって、どこそこで待ちあわせるのだが、すんなり目的地へ行けたことがない。大阪駅で下車して道に迷い、こんどは大阪駅をたずねていくという仕末だが心だけは方向音痴にしたくない。

▼六月句会、お世話になります。（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼あまり物事にこだわらない私ですが、地下鉄に乗っていて窓硝子に映る自分の顔を見てギョッとすることがあります。私の周囲は皆この不況の中で一生懸命働いている顔ばかり。社会の中の自分の位置を改めて考えさせられるのは、そんなときです。

アリナミンA
お役だていただくために タケダ
肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB1補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆1日1～4錠を1～3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！
大阪・東京
大丸
京都・神戸

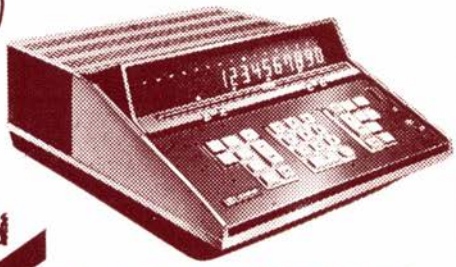
昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年五月二十五日 印刷
昭和五十一年六月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五八九号

川柳塔

六月号

定価 三百五十円（送料二十九円）

タッチでえらべば
やっぱりサコム



サンヨー電子式卓上計算機
サコム
SACOM

見やすい設計　ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・√%キー付き
16ケタ2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社

HORAI

551
蓬莱商品の目印

アイスキャンデー
あずき・パイン・ミルク・チョコ
ソフトクリーム
バニラ・ミックス・チョコ

蓬莱
大阪・なんば

《出張販売》高島屋 そごう・阪神
松坂屋・京阪デパート・奈良近鉄百貨店